

海洋教育パイオニアスクールプログラム 成果報告書：海洋教育のデザイン

1. 学校名 私立岡山学芸館高等学校医進コース

2. 活動テーマ名 里海創生～吉井川流域および児島湾における生物多様性評価～

3. 実践の概要・ねらい

岡山県は児島湾干拓の歴史もあり、多くの海岸が護岸されている。ゆえに、瀬戸内海沿岸他県と比べ海への興味・関心を持ちにくい。さらに、生物基礎で学習する生態系や物質循環の単元において、生徒の理解・視点を広げるためにフィールドでの探求活動が求められている。本校は吉井川河口近くに位置し、里海学習のフィールドとして期待できる。NPO法人里海づくり研究会の協力や地域に根ざした環境教育を求める声も寄せられている。「里海」モデルケースとして注目されている日生湾でのアマモ再生活動に関する体験学習に参加し、地元吉井川河口域の環境と比較する。それらの活動を通して、本校医進コースの課題研究として、児島湾における生物多様性調査に継続的に取り組むカリキュラムの開発を目的とする。

4. 実践計画

①テーマ・概要・活動計画、教科等との関連

★は日生中学校との協同学習 ○は2年、3年のみ

日付	時間	概要・活動計画	教科等との関連
6月14日	2	★日生湾アマモ流れ藻回収体験	生物・生物基礎
6月22日	2	○日生湾鹿久居島干潟フィールド調査	生物・課題研究
7月11日	1	聞き書き事前学習	現代文・情報
7月13日	4	★日生漁協聞き書き学習	現代文・情報
7月16日	2	○日本生物学オリンピック予選	生物・生物基礎
7月22日	2	澁澤寿一博士講演会	生物・生物基礎
7月25日	2	○日生湾鹿久居島干潟コドラート調査	生物・課題研究
7月28日	2	○日生・吉井川河口プランクトン調査	生物・課題研究
8月4日	2	○吉井川河口乙子干潟コドラート調査	生物・課題研究
8月7日	2	○岡山大学沈健仁教授研究室訪問	生物・課題研究
8月11日	16	医進夏季宿泊研修	生物・課題研究
8月12日		鳥取大学大山演習林・鳥取砂丘	
8月22日	8	○マリンチャレンジプログラム中四国学会	生物・課題研究
8月29日	3	★聞き書き編集会議	現代文・情報
10月13日		海の宝コンテスト聞き書きプレゼン応募	情報
10月18日	3	★アマモ種取・種まき体験	生物・生物基礎
10月18日	1	★聞き書き編集会議	現代文・情報

10月25日	2	○吉井川河口乙子干潟フィールド調査	生物・課題研究
10月26日	2	アマモポット作成・アマモ講演会	生物・生物基礎
11月18日	8	○サイエンスチャレンジ岡山県大会	理科・情報
12月2日	4	○環境フォーラム岡山（環境学会）	生物・生物基礎
12月13日	2	★木村尚先生講演会	生物・生物基礎
12月17日	2	医進ミャンマー研修	コミュニケーション
12月23日		（海洋学習英語プレゼン）	ン英語Ⅰ・情報
1月26日	2	柳哲雄博士講演会	生物・生物基礎
1月27日	4	★里海シンポジウム発表	生物・情報
2月14日	6	★カキ洗浄・出荷体験およびBBQ	生物・生物基礎
3月1日	2	○吉井川河口乙子干潟コアリング調査	生物・課題研究
3月2日	2	○日生湾鹿久居島干潟コアリング調査	生物・課題研究
3月24日	8	科学オリンピックへの道 チャレンジ	生物・課題研究
3月28日	8	○マリンチャレンジプログラム全国大会	生物・課題研究
3月29日	16	医進春季宿泊研修	生物・地学・物理
3月30日		spring 8・兵庫県立大学西はりま天文台	課題研究

②実践の評価

各種体験・講演会ごとの感想・振り返りポートフォリオならびに各種コンテストへの応募実績にて評価

5. 今年度の実践

①計画からの追加・変更点

マリンチャレンジプログラム中四国大会で優秀賞となり、全国大会発表の機会が得られた。また、澁澤寿一博士講演会については岡山学芸館高校の負担で追加実施した。

②実践の成果

1) 日生湾アマモ流れ藻回収体験

6月14日（水）

日生中学校との協同で、アマモ流れ藻回収を行った。小型の漁船に乗り海を疾走する。流れ藻を回収することで、アマモが被子植物であることを実感する。また、流れ藻に産み付けられたイカの卵を見つけたり、さまざまな生物が付着している様子を観察したりすることで、「海のゆりかご」という概念を理解できた。



生徒感想

竹田友希：今日の日生の実習はとても貴重な体験になりました。あのような船に乗るのは初めてだったので、水面との近さに驚きましたが、そのおかげでいつもは遠目にしか見たことのなかった海中をよく見ることができました。今まで海草の必要性をよく分かっていなかったのですが、小さなカニやクラゲなどがアマモの近くにいるのを見て、海の生物にとっては大切なのだと気づき、見方が変わりました。

魚橋江梨子：私たちが乗っていた船を操縦してくださった漁師さんのお話では、その方が子供の頃は流れ藻はほとんど見たことがなく、お父さんの世代から種を撒き始めて、現在のような状況になるまで約30年ぐらいかかったということでした。そのくらい長い時間と苦勞をかけて海の自然を守っていかうとしている日生の方達の素晴らしさを身にしみて感じ、また流れ藻と様々な生物が支えあって生きているということを実際に見ることができて本当に良かったです。

細川美月：なかなか乗ることのできない船に乗ったり、流れ藻を回収することができてとても楽しかったです。流れ藻が海のなかで揺れているのを見ると、これが被子植物だとは思えませんでした。私たちにとってはあまり必要のない流れ藻も他の生き物にとっては産卵場所や身を守る場所としてとても大切な役割を果たしていることが分かりました。とてもいい体験ができました。

松下明香里：流れ藻は魚などの生物たちの産卵場所になっていること、外敵から身を守ることなどを意識して、体験をすると、生態系を保つために大切な役割を担っていることがよくわかりました。とても良い経験になりました。ありがとうございました

宋野祐也：初夏の気持ちいい時期に海に行くことができ、とてもさわやかな気持ちでした。藻をとても沢山採取しましたが、何の為にイカダに繋げていたのかが気になったので、調べてみようと思います。普段は絶対しない藻の採取が出来て良かったと思いました。

森本雄大：今日の実習ではアマモの回収をするとともにアマモの形質を観察する事ができた。その後は日生中の人たちが養殖していた牡蠣を見るという貴重な体験ができた。また船長さんによると今回どの班も行っていないアマモが根を張っているところに連れて行っていただいた。そこではアマモが生息しているところとしていないところでは水の透明度が違う事が改めてわかった(水の透明度が高いのはアマモが生息しているところ)。このことからサンゴと似た性質があるかなと思いました。とてもいい体験できたと思いました。

米澤葵：今日の日生の流れ藻の実習では、海が綺麗になりすぎても汚すぎても生物が生きていくことが難しく、生物が生きていくのにベストな環境は程よく流れ藻があることというのが分かりました。そして、牡蠣の養殖をする為に使われていることに驚きました。流れ藻は、日生の人々にとって大事であることを感じました。貴重な体験をさせて頂いてありがとうございました。

竹内サラ：今日の流れ藻の回収で生態系は色々な生物がいることで成り立っていることが分かりました。藻とかは今まで邪魔なものだと思っていたけど体験を通して生態系のためになる大切な一部なんだと感じました。とてもいい経験になりました。

阿ムエル：今日は船に乗って、流れ藻の回収の実習をして、とても楽しかったです。流れ藻を回収するとき、藻は邪魔なものだと、僕が思っていたんですが、牡蠣の養殖する為に使われているのを見ると、藻の大切さを感じました。よく考えると、海は汚すぎても綺麗すぎても、生き物によくない、つまりどんな生き物でも生態系を保つ為に大切な役割を担っていることが分かりました。今日はとても良い経験が出来ました。

飯塚朝葵：今日の実習を受けて。正直に言うと、日生の海のことを何一つ調べず、何も知らないままで参加してしまい、最初は、ただ漠然と、アマモを回収するだけなのだなと思っていました。しかし、実際にやってみると、すごい肉体労働で、とても疲れました。そのぶん、新しい経験を沢山させていただきました。牡蠣の養殖イカダを見た時は、下まで澄んで見え、とても感動しました。アマモと、牡蠣の二つの生態系が、お互いに支えあっていくように、人が手を入れるということに、そういったことをしているのだなど、新たな発見が出来ました。とてもいい経験になりました。

杉本祥太郎：始め、アマモを人工的に植えていると聞いたときはあまりいい印象は受けなかった。しかし日生の海は想像以上に生き物が少なく、実際に蟹などがアマモを住みかにしていて効果があると思った。日生中学校の生徒たちと交流できたことも良かったです。それにしてもあのイカが気になります。イカがなものかと。

福田紗弓：今日は日生まで行き、船に乗って実際にアマモを自分の手で取った事がとても貴重な体験をする事ができてよかった。種子を見る事もでき、さらに、アマモの茎の部分に魚の卵のようなものをも見つけることができた。牡蠣を養殖している所も見せていただくことができた。牡蠣も、養殖する際に真珠の殻につけて育てるという話も伺った。これらのことから、海の生物も共生していることがわかった。さらに、藻は海をきれいにする働きもあるため、藻を今まで嫌っていたことに罪悪感を感じた。

川淵涼介：中学校の時に、何度か経験した流れ藻の回収をしました。いつもは同じ学年の同級生だけでやっていたけど、今日は日生中の後輩もたくさんいてとても楽しかったです。まだ、一度も経験したことのない中 1 の人もたくさんいたので、今回は、先輩である僕が教えてあげながらみんなで協力しながらできたのでよかったです。アマモは、かつて船のエンジンの部分に絡みついたり、海面に浮いたりして、「じま藻」とまで呼ばれ、邪魔者扱いをされてきました。しかし、近年、アマモによって海の生態系のバランスが保たれていることが分かり、アマモの再生活動が始められました。また、そのアマモ活動にも、漁師たちの大変な苦労がありました。そこで諦めず、海を綺麗にしようという漁師たちの熱い思いが僕たちに綺麗な日生の海を伝えてくれています。その漁師たちの努力を無駄にすることなく、後輩たちに綺麗な海を伝えられるように努力していきたいです。そのためには、まず、身近な「海にゴミを投げ込まない」や、「海岸のゴミを拾う」などの細かなことから注意していきたいです。

岡本侑大：今回は日生に行きアマモの回収をした。日生に住んでいるからであろうか一緒に活動した日生

中の人たちはアマモの回収をスピーディーにこなしていた。自分としては近畿の真ん中の住んでいたのが海と触れる機会が旅行程度しかなかったので、とても楽しむことができた。日中生の中の人たち 担当してくれた船長さんに感謝です。アマモを収穫した際アマモを少し観察していると根があった。根があるということは昔陸上に生息していたのではないかと思った。そしてクマノミがイソギンチャクを住処にしているようにアマモにも生物の住処になっているのではないかと思った。つまり、アマモは生態系を保つ重要な生物であると思った。

劉美辰：今日は漁師の指導の元で、アマモの回収をしました。初めてアマモを触って、アマモの小さいところをはっきり観察ことができました。これまで、アマモは汚いところであって自然界には役に立たないものというイメージでした。最近海の汚染によって、アマモの数量が増えてきたそうです。でもアマモを牡蠣の養殖のために使われています。人に役に立つものになりました。そして、アマモが集まっているところは魚卵のようなものを見つけることもできました。もしアマモ全部消えたら、隠す場所がなくなって、魚の卵はすぐ外敵に食べられるかもしれません、そうすると海の生態系のバランスが悪くなります。それを考えた時、アマモのような人に無視されるものでも自然系で重要な役割を担っていると言うことが分かりました。漁師さんも一生懸命環境を守っています、漁師さんに本当に感謝いたします。今回の体験は貴重な経験になりました、ありがとうございます。

岡田翔伍：今日は船に乗ってアマモを採取するという他ではなかなかできない体験をした。そこでアマモ等植物が海中にすむ生物に様々な形で関わっているとわかった。例えば、いかはアマモに産卵しているし、アマモが枯れた残骸をプランクトンが分解し、プランクトンの数が増え、そいつらを食って魚等水生生物がやってくる。この関係は一方が増え過ぎたりするとうまくいかなくなるとわかり、少し感動した。でも、「牡蠣の数が多いところは水がとても透き通っている」と聞いて牡蠣が周囲のプランクトンを食い散らかしているから透明なのだと感じて、透明な海を素直にきれいと思えなくなった。調べてみると透明かどうかは主に海流に含まれるプランクトンの数や海底の砂でまきまらしいとわかった。それがわかって透明な海を受け入れられるようになった。また、今回の体験で濁った海はただ汚いわけではないとわかり、瀬戸内海が少し好きになれた。また、港に戻る途中でビニール袋が漂っているのが見えて植物ですら海をきれいにしているのに、人間はなぜ汚してばかりいるのか残念に思った。体験はとても楽しかった。もっと多くの事をしてみたいと思った。

竹原和可子：今回初めてアマモの回収を体験して今まで海に行った時は正直汚いと思っていた流れ藻が生態系を守るためにとても重要なものだと分かりました。また、アマモと聞いた時のイメージと実際に見たアマモが違って驚きました。私はこんな体験をしたことがなかったのでとてもいい経験になりました。また、漁師の方に教えてもらいながら中学生と協力して回収してとても楽しかったです。アマモを回収した時にアマモに卵のようなものがついていたり貝のようなものがついていたりして今まで海に良いイメージを持っていなかったけど海に興味を持つことができました。それと同時に海や生態系を守るために自分たちができることを積極的にしていきたいと思いました。

野口碧希：シンポジウムの際に、アマモを漁場に植えたら漁場が再生したと聞いていたのでアマモがどんなにすごいものかと期待していたが、海水浴の時とかに普通に見られる海藻だったことに驚いた。実際に海に行くとアマモを取って来て思ったことは、アマモの働きは水の浄化ではなく、隠れ場の提供、産卵場

所などの海のゆりかご的な働きがほとんどなんじゃないか、ということだ。僕は海より山の方が好きだけど、海の植物も山の植物も役割はほぼ同じで実に興味深いものだと思った。

林原向日葵：アマモ場は海のゆりかごといって様々な魚の産卵場所となっていることは以前から知っていたのだが、今回、日生の海に産みつけられていたイカの卵やアマモにくっついて生きている生物を実際に見ることができてよかった。生物たちにとってアマモ場は本当になくってはならない場所なのだろうと実感することができた。また、アマモをとっている最中、小学生の子がアマモではなく、ガラモを見つけた。漁師さんから、「アマモではなくガラモを積極的に育てている県もある」という話しも聞くことができ、ガラモとアマモの違いについても自分で調べてみようと思った。

2) 日生漁協聞き書き学習

7月13日(木)

聞き書きに関する事前学習会を経て、実践を行った。アマモ回収に携わってきた日生の漁師の皆さんや漁協関係者、NPO 法人里海つくり研究会議の田中さん、海洋政策研究所古川さんなど、さまざまな立場の方から聞き書き行方。日生中学校の生徒とグループを作り、新聞編集やプレゼンでの発表までを計画し、取り組むことが出来た。



生徒感想

劉美辰：今日は日生で聞き書きをしました。先輩の手伝いを基にして、喜江子さんの話を伺って、海についての知識が増えました。楽しかったです。漁師さんとして一年間最も忙しい時期は十二月で、最も楽の時期はいんです。変わらないことは毎日夜中1時起きて、漁をすることです。それを聞いた時本当に驚きました。牡蠣が小さい頃死にやすいので、入念に世話をしなければならない。辛いこともよくあり、赤字になったことも時々あるけど、毎日希望を抱えて、生活しています。そういう生き方は勉強になりました。何をしたいと聞いたら、特にしたいことはなくて、これから十年間まだ日生で漁をしたいそうです。今は68歳の喜江子さんは、一生をかけて海を守っていきます。喜江子さんの精神に感動しました。これから海を守るのを少しでも役に立ちたいです。

細川美月：今日の聞き書きで、実際に漁師をしている人の話を聞くことができ、たくさんを知ることができました。話を聞いていてとくにおどろいたのは台風が来ることのメリットについてです。私は今まで台風は漁師にとってとても邪魔なものだとばかり思っていました。しかし、台風によって、海の底が耕され、それによって沼の悪いものを食べてくれる虫が住めるような環境ができ、耕されたことによって栄養が上に上がってくるなどのメリットがあることを知り、とても驚きました。今日学んだことをしっか

り整理し考え、今後の生活に生かしてきたいと思いました。

竹田友希：今日、田中さんに興味深い話をたくさん伺うことができました。その中で私が特に印象に残っていることは、綺麗な海を未来へ繋げていくために何ができるか、という質問に対してその土地で獲れる魚を食べること、と答えられたことです。最近では輸入された魚がスーパーなどで売られる事が多くなり、季節よっての食べ方などを伝えながら魚を売り、文化を継承していくというような形式の店がなくなっています。物質循環を正常にする、海ごみを回収する、などといった活動は私たちには難しいですが、身近な海を感じ興味を持つ、という事も大切だと知りました。今日学んだことをより多くの人に伝えていくには、どうすれば良いかという事をこれから考えていきたいと思いました

岡田翔伍：今日の聞き書きでは漁師の方から、現場で生計を立てている人ならではの視点からのものの考え方を聞くことができた。自分がいかに先入観を持ってものを見ているかがよくわかった。例えば、漁師の方は海で漁をする事で生計を立てているから、海を愛しているものと考えていたが、自分たちの生活を維持するのに精一杯で海を愛するとかそんなことを考える余裕はなくて、若い頃は海を稼ぎ場としか思っていなかったと知った。やはり現場を生きる人の経験を聞くことは大切だとわかった。また、アマモ再生は、小さな積み重ねが長い間続けられたことでやっと芽を出したと知ったので、何事も継続が大切とわかった。この聞き書きで学んだことをこれからの生活に生かしていきたい。

阿ムエル：今回の聞き書きを通して、漁師という職業の特徴と、アマモに関する知識を知りました。そして、アマモを増やすために自分たちは何が出来るのか、何をすべきかと言うことが分かりました。日本人にとって海は伝統の一部であることも分かりました。これはとてもいい経験だと思います。今回学んだことをしっかりまとめておきたいです

福田紗弓：聞き書きは初めてだったが、色々な話を聞くことができ、とても貴重な体験になった。私は、磯本さんに話を伺い、今までの経験や、思っていることを直に聞くことができた。牡蠣の養殖やこの前のアマモについてなど、色々な話を深くまで知れた。漁師の視点でアマモを増やすだけではなく、今後のアマモが及ぼす影響についてを考えなければならないということを知ることができ、私たちの考えとは違うということを実感できた。「学者の考えとは違って漁師としての考えだから正しいとは言えない、」と磯本さんはおっしゃっていたが、実際に文字に起こす時に、様々な視点で書くことができそうだと思います。磯本さん目線でお話が聞けたのがとてもよかったと思った。

川淵涼介：僕たちは、NPO 法人の田中さんにお話を聞かさせていただきました。田中さんは海関係の研究者として日生の海を見つめ、アマモ場の再生に携わってきた 40 数年間の出来事を事細かに教えてくれてとても聴きやすく、わかりやすかったです。本田さんの死などの悲しい出来事から嬉しかったことまで全て教えてくれました。今回の話で教えてもらった僕たちがこれからしていくべきことの他の人に田中さんたちの活動を伝えていくということを大切に、今後の活動も頑張っていきたいです。

魚橋江梨子：前にアマモの回収に行った時は日生の海だけにしか目を向けられていなかったけれど、今日のお話を聞く中で日生の海から日本、世界の海へと視野を広げることができました。また、海を再生するためには、周りの山や川にも視点を置いて対策を練る必要があるなど、自然の繋がりを改めて感じました。

今日の聞き書きで得たたくさんの方の知識や思いを、まずは身近な家族などに伝えて、世界の自然をこれから先も、良い状態で残せるように、「知って伝える」ということを大切にしていきたいと思います。

杉本祥太郎：質問したことに丁寧に返してくれる早川さんから漁師の器の広さを感じられた。アマモで里海再生計画を全国に広めていくのにあたってデータとしての成果が必要だそうです。機会があれば少しでも役に立ちたいです。

松下明香里：今日は実際に漁師さんに話を聞くことができよかったです。最初は、全く漁師の仕事に関心がなかったけれど、奥さんの方の親の手伝いをしたことがきっかけで漁師になったことや壺網漁は、規模が小さいので2人で行え、自然任せのものであるから自然にあまり影響しないことなど多くのことを知ることができました。今回学んだことをしっかり伝えられるようにまとめていきたいです。

岡本侑大：今回、藤生喜江子さんのお話を聞くことができた。藤生さんはカキの養殖、壺網漁をしている方で、貴重な話を聞くことができた。自分はあまり海などに触れる機会はあまりなかったが、話を聞くことで海や川などに生息する生物について少し興味を持つことができた。他にも今後の人生のことに対する話も聞くことができた。普段人から聞いてそれを自分の中に取り入れる機会はなかなかないのでとても熱心に取り組むことができた。まだレポートにまとめるまで続くので引き続きがんばっていききたいと思う。

米澤葵：今日聞き書きを初めてして、人から話を聞く事の大変さと、重要さを感じました。漁師という自分の知らない世界の話を聞くことは、驚きと初めて知ることばかりでとても楽しかったです!! 漁師の人達が肌で感じている海の環境の変化や魚達の変化の関係性を直接聞くことができて、そういう事があるのか。とか、学者さん達が言ってることと少し違うこともあるんだな。と分かりました。磯本さんは、おせの大切さ、自然の再生力の強さについてたくさん教えてくださり、カキの養殖とアマモの関係や、他のところと比べて日生の仲間意識の強さ、一般の人と漁師の考えの違い、海を育てるためには山から大切にすることなども教えていただきました。今日の聞き書きで、自然の力と、自然の関係性、今後のためにどうするべきかということ学ぶことができ、今後の活動の参考にしたいです。そして、しっかりまとめて今後のために身につけたいです。

森本雄大：今日の聞き書きでは、日生漁業組合の天倉さんに、漁業組合の人の立場からアマモによる海にもたらす効果やアマモを増やすためにも自分たちに何が出来るかを学ぶ事が出来ました。また、日生漁業が力を入れている牡蠣の養殖の仕組みや日生漁業が行う多様な漁法についても学ぶことができ、とてもいい経験だと思いました。今回学んだ内容をきちんとまとめておきたいです。

竹原和可子：今日、初めて聞き書きをして普段の授業では聞けないことが実際に聞いて良い経験になりました。漁師の方が「学者と実際に海に携わっている人では考え方や思っていることが違う」と言われていたのが印象に残っていて、今までネットに書いてあることなどをよく参考にしていましたが実際に関わっている人に話を聞くことはとても大切だと分かりました。今回学んだ内容をまとめる時には私達が学んだこと、漁師の方が伝えたいことをしっかりと伝えられるように文章にしていきたいです。

竹内サラ：今日の聞き書きはとてもいい経験になりました。最初は用意していた質問がすぐに終わってし

まって困りましたがその後は天倉さんのお話のわからないことや深く聞きたいことを聞いているとあっという間に時間が過ぎて行きました。とくに興味を持ったのが牡蠣の養殖についてです。牡蠣の養殖とアマモ再生は深く関係していることを知りました。それと成長具合によって漁場を分けていることも知りました。びっくりしたのは岡山の牡蠣の水揚げ量の50%は日生漁協が占めているということです。普通に生活しては聞けないような貴重でとても興味深いお話を聞くことができとてもよかったです。学んだことはここに書ききれないほどあるのでしっかりまとめて、自分の力にしていけたらいいなと思っています。

宗野祐也：今回の聞き書きの活動を通して、今日の海洋政策に関わっておられる方がどんな活動をしているか、どんな想いを持って活動しているのか、という貴重な意見を聴くことができ、海について考えることができました。今後のまとめの時にも今回教わった内容を活かしながら活動したいと思います。

春名高歩：普段僕達は、同世代の人達としか話す事がないので、今回の人生の先輩方の話を聞く事は、いい経験となった。漁業の事についてだけでなく、社会人としての事も多く教わった。聞いた話を、「記憶」から多くの人へ伝える「記録」へと変えたいと思えた。

普段聞けない漁師さんの話が聞けて為になった。

服部蒔季：実際にお話を聞いてつば網漁、カキ養殖、アマモ場再生活動の事はもちろん、今は水クラゲが多くて困っているとか漁師が森に木を植える取り組みをしているとか様々な事を聞くことが出来た。藤生さんからこれから生きていく上で大切なことも教えて頂きとても良い経験になった。つば網漁体験をしたいとお願いしたところ、9月末から10月ぐらいなら余裕があるとの事だった。昨年からCO-OPの人たちがそういうのをしているという事だったのでそれに便乗したらどうだと言われた。私もぜひ体験したいと思った。

福田楓：今回、古川さんにインタビューをして経歴、活動内容、活動に対する思いなどを聞けてたくさんのことを学ぶことができた。古川さんが私たち中高生に求めることは多くの人の関心を海に向けてもらうために、海について深く知り、そのことを伝えていくことだそう。今日、お話を聞いてそれはとても重要なことだとわかった。そんな重要な役割が私たちにはあるということをお忘れずにこのプロジェクトを進めていきたいと思った。

土井翠：漁師の妻、という、私たちが普段接することはないであろう方から、自分の人生、思いなど、たくさんのお話を聞いて、学べて、とても良い経験になった。自分たちが送ったことのない生活を聞くのはとても面白いと思った。藤生さんは、今の中高生にもっと海に関心を持ち、海を好きになってもらいたいそう。だから、私は、見る人が海に関心を持つきっかけを作れるようなパワーポイントをつくりたいと思う。

3) 澁澤寿一博士講演会「君たちの生きる時代とは」

7月22日(土)

共生の森代表の澁澤寿一先生にご講演頂いた。「聞き書き」を高校生に広めはじめたきっかけや、古代からの日本人としての知恵を繋いでいくことの重要性を、高校生にも分かりやすくご紹介くださり、多くの気づきを与えてくれた。

生徒感想

阿ムエル：澁澤さんのお話を聞いて、今、そしてこれから僕たちが生きていく社会はどのような問題があるのか、そしてどう改善すべきか、ということを考えてみました。今僕たちが生きている世界はまさに「お金の世界」で、人々はお金のために一所懸命働いて、みんなが「お金があればなんでも出来る」と考えています。しかし、事実は逆です。みんなは「お金」という架空なものに支配されているに過ぎませ。人と人の距離感が増え、「無縁社会」になっていくのも、自分の努力は全く関係のない円高によって否定されるのも、その証拠です。この様な社会は、本当に「未来」があるのかと僕が考えました。いくら経済が発展しても、先進国であっても、人々が決して幸せとはいえません。何故ならば、人と人、人と自然の繋がりが無いからです。昔からの生活は村で人々が助け合って生活してきた。祭りや集団活動で人と人、世代と世代の絆が深める。そして、昔の人は経済がそんなに良くなくても、みんな幸せだと感じます。昔の生活は今の問題を解決するのにヒントをくれるかもしれません。今回のお話を聞いて、普段に当たり前だと思ったことは、普通ではないかもしれないし、間違っているかもしれないということが分かりました。世の中には自分が知らないことまだ沢山あるので、これから色々なことを経験し、出来るだけ多くのことを学び、僕たちが生きている社会を変え、より良い社会を作ろうと思っています。

今日は本当に有り難うございました。

岡田翔伍：私は澁澤先生の話聞いて生物は何らかのつながりがなければ生きていけないと強く思いました。どんな生物も影響を受ける、与えるというようにつながりを持っています。もしつながりがなくなってしまうと、どんな生物だって生きていけません。それなのに人間は自分一人で生きていけると錯覚しているとわかりました。技術が進歩して、何でもできるように感じてしまったからなのでしょう。しかし、よくよく考えてみれば、技術によってもたらされる利益だって結局は何かとつながることでもたらされるものだと思います。時が経つにつれて人が他のものとのつながりを持たなくなったのではなく、もともとあるつながりを自認できなくなったのではないかと思います。そうなった原因は人がつながっているものを感じられない、閉鎖的な環境を生きるようになったからだと思います。自分のことで手一杯で他のことに目を向けられない。そういった心の余裕のなさがつながりを見落とさせ、自分一人で生きていけると錯覚させているのでしょう。私は心に余裕を持ち、様々な視点から物事を考えていこうと思いました。そうして、少なくともつながりのあるものに優しい生活を送れるようにしていきたいです。今日はためになるお話をありがとうございました。

川淵涼介：僕が、澁澤先生の話聞いて一番印象に残った話は、森で暮らすおじいちゃんの話です。僕たちは、生活の中でご飯を作るためにお店で食材を買い、それを調理して食べたり、病気にかかる病院に行って診てもらい、薬をもらって治します。しかし、自然の中で生きている人たちは、食べ物は、狩りで捕まえた動物や採った山菜を調理して食べ、病気の時は知恵を使って山の木から薬を作ると聞いてとてもびっくりしました。僕は、正直今回の話を聞くまで「聞き書き」をする必要性を理解していませんでした。しかし、今回の話で、森で暮らすおじいちゃんのような人から実際、澁澤先生が聞いた話を聞いて、「聞き書き」の本当の意味を理解することができました。今、僕たちは中学生と一緒に海洋学習で、海を再生するために漁師さんたちが体験したことを実際に漁師さんから聞くという聞き書きをしています。今日のお話をこの活動に活かして、地元の海についてもっと知り、これからどうしていきべきかを考えていきたいです。そして、僕たちが漁師さんたちから学んだことを、澁澤先生が僕たちに聞いた話を伝えてくださったように次世代の子供達や家族など多くの人に伝えていきたいです。今日は、貴重なお話を

僕たちにしてくださってありがとうございました。

杉本祥太郎：澁澤先生の話で出てきたエコロジカルフットプリントで、現在人間が地球の成長量の約 1.5 倍を使用していること知り、事の重大さを改めて感じました。これまでは傍観的にこの問題について考えていましたが、皆の講演後の質問を聞いて、他人にどう広げようか、というのではなく自分自身がしっかりと意見を持ち取り組んでいくことが大切だと思いました。人々の考えや思想はある一定の線を越えると一気に広がるそうです。自分がこの問題に肯定的な考えを持ち続けていれば、それは傍観的ではなくこの問題を解決する原動力になっていると思います。ありがとうございました。

森末雄大：澁澤先生の話でもっとも納得できたのは、生活は買うものではなく、作るものであるという事です。元々、言語が共通でない世界の中でコミュニケーションにおける便利な道具として存在していた「お金」は、昔は自分達でつくりだすものを買うために使い、大部分を働いてまかなっていた。しかし、自分達が生きるために働かなくなった現代では生きるために必要なものを全てお金を使う、よってお金を稼ぐために働いている。この事から働くという目的が大きく変わったのだということが分かりました。また、今のほとんどの家庭における所得は大きく社会の経済に関わっているため、日本の経済に人の所得、および人生が大きく左右されると改めて思いました。今後の未来を担う僕らだからこそ、昔の暮らしを改めて学び、その暮らしを取り入れ、自己の生活を自分で担うとともに、社会との関わりもきちんと保てるような社会を作らないといけないなと思いました。

飯塚朝葵：正直に言うと、驚いたというのが本音です。お話をされた内容がとても多く、とても濃いもので、聞くのに精一杯だったからです。これまで、こんなにも多くのことを、短時間で聞こうと思ったことすらなかったのも、とてもいい経験になったと同時に、これからは活かせる体験となりました。『地球が切羽詰まった状態である』ということは、小学校の頃から、色々な形で、色々な出来事をたくさんの人から教えてもらってきて、少しは分かっていたつもりでした。けれど、どれも自分にはあまり馴染みがなく、大きな問題すぎて、そんなに深く捉えることができず、ただ漠然と『大変なこと』になっているから『なにか社会や地球にとって良い事』をしなければならぬ。としか思っていませんでした。

しかし、今日のお話の中で、人間が自然の利息をすべて使ってしまうことや、お金だけがすべての世界になってしまっているのではないかということなどを踏まえて、本当に『自分ができることの最大』をしたいと思えました。私は今まで、そんな風に、漠然としか問題を捉えられていなかったのも、自分の将来や、地球の未来にそこまで大きな不安を抱えることは無かったのですが、それがとても恥ずかしいことだと思いました。今日、改めて『未来・将来』ということを考えてみた時に、たしかに、先生のおっしゃったとおり、なにを自分の中でモデルにすれば、不安を感じずに過ごすことができるのかというのが一番に私の頭の中にできた疑問でした。『50 年以上前の暮らし方』をモデルにというふうに考えた時に、すぐに納得できたのは、80 をすぎた祖父母がまだ手に職を持って働いている姿を、毎日、この目で見られているからなのだとということには、先生のお話の後半になって、やっと気づくことが出来ました。私は、大阪から岡山の備中高梁というとても田舎の祖父母の家に、1 人でやってきて、一緒に暮らしているのですが、ほんとうに、町内の“繋がり”はとても凄いいもので、こちらに来た時によく驚いたことを覚えています。町内の人たちは、みんな農家や自営業の方ばかりで、生きるために仕事をしている方ばかりです。そして、みなさん、それぞれのお仕事に誇りを持っているのが、中学生の私でさえも見ていて分かり、とても感動しました。岡山に来て、働くということの大切さと、有り難さ、そして、楽しさを、私は一気に学

ぶことが出来たことに、先生のお話を通して、『きちんと感謝しないといけない』と思うことが出来ました。私たちにとって、まだまだ不安のある世の中ですが、祖父母の姿や、町内の“繋がり”を見ることで、少しでも“繋がり”の大切さを、“五感”で感じ、そして、これからの世代へと繋げていく、そんな時代を作っていけたらと思います。今日は本当にありがとうございました。

竹内サラ：澁澤先生のお話を聞いて、衝撃を受けました。自分にはない新たな視点で考えられていることを聞くことができ、本当にいい経験になったなと思いました。私が当たり前とと思っている生活とは違う生活の仕方があることもわかり、興味を持ちました。1番驚いたのは、今私たちは地球1.5個ぶんの自然を使っていると言うことです。そんなことをしていたら先生もおっしゃっていたように未来に限りがあると実感しました。私たちにできることをしっかりと実行できたらな、強く思いました。今日は本当に貴重なお話をありがとうございました。

竹田友希：今回の、澁澤先生のお話は驚くことばかりでした。例えば、同じ日本の中でも、自分と全然違う暮らし方をしている人がいるという事です。自分は、若いうちはしっかりと勉強をして、大人になったら社会に出て働き、稼いだお金を使って生きていくという暮らしが当たり前だと思っていました。しかし、今日のお話を聞いて、もしお金が機能しなくなったらどうなるのだろうかと考えた時とても怖いと思いました。また、自給率のお話を聞いてから、自分が今使っているものの殆どが、誰が作ったものかが分からないという事が悲しいと感じました。当たり前のようにお店で必要なものを買って、何も考えずに利用していた事に後悔をしました。日本は無縁社会だという事を、自分はあまり深刻に考えた事はありませんでした。何故なら自分の生活の中で繋がりがないと困ると感じた事がなかったからです。要らないとは思いますが、繋がりが薄くてもそれなりに生きて行けると思っていました。しかし、今日のお話を聞いてそれは間違いだと強く思いました。そもそもこの今の暮らしは今を生きる人間の為のもので、次の世代、その次の世代のことを考えた暮らしをしようと思うと、やっぱり繋がりが重要で、今が良ければいいという考えでは絶対に出来ないものだと思います。普通に暮らしていると当たりの事が当たり前でないと気がつく事がなかなか出来ないのです、今日のお話はとても貴重で、衝撃的でした。

自分にはこんなに知らない事が沢山あると知り、これから色々な経験をして、もっと多くのことを学びたいと思いました。澁澤先生のお話を聞いて、自分の視点が大きく変わったと感じています。今日は本当にありがとうございました。

福田紗弓：今のままだと、この先の世代が繋がっていくことが難しいということが聞き書きをする事によって新たにわかっていくという事はすごいなと思った。人の価値観はそれぞれであることは少しだけ知っていたが、聞き書きをする時に自分の価値観と相手の価値観を対比させて考える事ができるため、視野が広がっていいなと思った。生物について話をされた時、今までの長い歴史をかけて生き物や人間が共生しながらつくりあげてきたものを私たちの欲望によってすぐに途絶えさせてしまう事があるというのは、すぐに考えないといけない事だと思った。澁澤先生がおっしゃっていた事も参考として取り入れながら、聞き書きをまとめたいと思う。

細川美月：澁澤先生の話聞いて、たくさんのことを学ぶことができ、とてもいい経験になりました。特に印象に残ったのは、森で暮らすおじいちゃんの話です。塩以外は全部山のものから作っていると聞いて、とても驚きました。また、昔の人は「仕事＝生きる」で、仕事が直接生きることに繋がっていたが、現在

は仕事で稼いだお金で生活し生きているため「仕事＝生きる」ではない、現在はお金さえあれば生きていけるが、昔は仕事をしなければ生きていけなかったことを知り、私はしっかり勉強し、ちゃんと仕事につけなければ将来生きていけないと思っていましたが、それ以外の道もあることが分かりました。

私は、お金さえあれば一人でも生きていけるから大丈夫、と思っていましたが、今日の話聞いて、もしこの世界からお金がなくなったら一人ではなんにもできないのだと感じました。

松下明香里：情報量が多く、ついていくのに大変だったけれど、多くの驚きがあり、これからの私たちの生きる時代についてたくさんを知ることができて、とてもいい体験になりました。私は価値観の違いについて、一番心に残りました。今までの人類の興味は自分が生きるために必要なものであったのに、今ではお金になっていて、震災後の村の人々の祭りを再生したいという希望が、コスパがわからないから実現できない、つまりお金に翻訳できないものは意味がないという考えを私たちの価値観がつくっている、生きることが他人任せになっているということに、私はお金を過信しすぎているということを実感しました。また、人類の価値転換が必要ということもわかったので、もっと視野を広げていこうと思いました。今日は本当にありがとうございました

米澤葵：澁澤先生の話聞いて、知らない事が多く出てきて、そんな事もあるんだ。と驚きと学びばかりでした。農家のおじいさんおばあさんは、自然と一体になって暮らし、自然の力で生き、自然を支え、これからの次の世代、その次の世代へと受け継がれるように様々な大変な思いをしながらも、山や森を守りながら生きている事に感動しました。確かに自分は、他人事で、誰が作ったか、どこで作られたかというのをあまり意識していませんでした。私も繋がりを意識して、今のおじいさんおばあさんの思いを知って、繋ぎ、後世、未来に繋いでいきたいです。先生の話の中から、現代の日本は良い状況にあり、今「当たり前」にしている事は、ずっと望まれていた状況である事を理解して、人の役に立てる様にみんなが幸せだと感じられる様にすばらしい未来を作っていきたいです。私はおじいさんおばあさんと関わる事はありますが、話を聞いたりしたことがあまり無いので、まず身近で農業をしている祖父母に話を聞いて、繋ぐという経験をしようと思いました。経済的な豊かさにとらわれず、精神的にも豊かな未来にしたいです。本当に今日はありがとうございました。

劉美辰：澁澤さんの話によって、今私たちが生活しているのはどのような社会を考えられました。現代社会の本質はお金の世界というものだと思います。ウォール街経済をはじめとして、人々が虚無な満足感を得るために、一生懸命働いて、お金があれば何もあると考えています。今の人間はお金によって支配されている。それだけではなくて、今社会の中で、人と人の関係は、「無縁社会」としか言えない。自分のことだけ考えて、他の人や社会には無関心だ。私たちが、誰のために生きているのを考えるのが必要だと思っています。自分だけではなくて、私たちの死後、子孫が健康に生きていくために、いまから自然や環境を守るのを始めたり、他人や社会に関心を持ったりを始めるとしています。持続可能な社会では、人と人、人と社会、人と環境が繋がって、お互いに包容できるという社会だと思います。正直というと、いま不安を抱えて生活している人は増えてきました。不安の根源はお金だ。彼らの願望は何かと聞いたら、職場で昇進したかったり、給料が高くなったりと違くないと思います。お金がないと生活できない、お金の翻訳できないものは価値がないという考え方を抱えている人は少数ではないと言えます。今成長している私たちはやるべきことは、幸せはどういうものかももう一度考え直して、暖かい人間関係を作って、いい社会を作るために努力するという事だ。今日は本当にありがとうございました。

砂子夕馬：渋澤先生の御話を聞いての感想、考察。まず、私たちの世代がいっとう重要に捉えるべき『持続可能な社会』を築きあげる事は、代表の一つとして先進国の生き方に問題点があると渋澤先生はおっしゃった。地球の足形’のグラフを用いてそれを聞いた時、私は、危機感を抱いた。自然が成長している量の遙か多くを人間は使い、自然の絶対量すら減らしているのは、時間が経つ毎に自然の成長量__利息__をも減らし、次世代の人間の事を考えずに便利を求めることに他ならない。この50年で、石油の半分が世界から消費されているのも、あまりにも強欲であり、それが身近なものであることには今、はっきりと気付いたことである。問題として、私や他日本国民が「我々は先進国だ」と誇りをもって言えるかどうか。以下の事を考えて、他の厳しい環境で生きる人達に、胸を張れるのだろうか。いつの間にか、人生をより効率的にお金へと変換出来るのが良い。費用対効果が高ければ高い程良い。という価値観が生まれて、それで社会は動いていた。それは誰もが身近に感じることができる、誰かに教わったであろう感覚で確かに、高度な知識を用いて稼ぐのは立派な生き方ではあるが、稼ぐという行為を生き甲斐としてよいのだろうか。日本の自給率は大幅に低下したり、日本に限らず地球温暖化は人類の『持続可能な社会』を主軸として見ると、これは重大な問題である。そしてこれらを見て見ぬふり、無視とも言える生活をして、このような状況をつくったのは、紛れもなく人類の考えと行動である。無視とは、愛情の枯渇した状態であるとおっしゃった、すなわち全体として、人類は地球に愛情を抱かなくなり、その代わりにお金や便利さに執着をもつようになったといえる。このような状況を改善するにはどうすればよいかは様々であるが、まず一つとして『価値観を変える、または理解する』ことをしてみる。お金とか、そういった’物’でなく、人からの感謝、承認を幸せと捉えることができれば、心はより豊かになり、無限の欲求をも満たされるのではないか。古くから、多くの村があり、そしてそれらのもつ価値観の複数は全て、結によって世代と共に形成された『自然と密接に関わりながらの』人との絆、交わりが一貫してあった。皆と生きていけるのが幸せだと、自然と共に素敵に生きる人達を手本にして、有限な地球を大切にしていこうという心が必要になってくると感じた。社会は、単純に考えて、高度な思考能力を持つ、自然を糧とする生物のまとまりであるから、それを持続可能にするには、まず自然を大切に、それを世代から世代へと繋いでいくこと。次に、思考を他人のために使い、幸せを分かち合うこと。最後に、『幸せを感じている状態を誇れること』こそが、何よりも大事な心だと思う。何をどう考えるのか完全な正解は、人々によって違うので、出せないと思う。しかし人は考えるから、時代を重ねる毎に限りなく正解に近づく。正解へと限りなく近付く道筋をつくる努力を、私たちの世代は行うべきだと感じた。今日の御話により、私個人が成長できたことに、知識を得られたことに、何よりの幸せを感じた。この知恵を、感謝と共に人生の中で役立てて行きたいと感じた。本日は、貴重な御時間、御話を有難う御座いました。

作野竜人：今の暮らしは地球に負荷をかけ続けるとは言うものの私はもうこの暮らしを手放すことは出来ない。例えば夏のクーラーなしの1日は活動可能時間がとても短くなる。自分自身で生きるという面でもそこを満たすことは出来ない。例えば昼ごはんは時間がもったいないから大豆バーで済ましてしまう。自分で食材調達をしない。調理をしない。これは他人に生きることを任せているということに他ならない。ではどうすればここから変わることが出来るのか。あと40年も生きれば答えは見えてくるだろう。今はまだ10年ちよいしか生きていない。そんな奴が何を考えようがそれは何10年生きてきた経験に基づく考えには遠く及ばない。人生を語る人間に年を重ねた人間が多いことがその証明になるだろう。そのためには今を積み重ねる必要がある。その積み重ねたものを見て初めて答えに気づくことが出来るのではないだろうか。もしかしたらこの考えも間違っているかもしれない。しかし何もしないよりはましだろう。机上論だけを展開して

もどうにもならない。とりあえずなんでもいいから地域との関係を意識できる様な体の動きを伴った経験を近いうちにしようと思った。

塚本裕太：自分が当たり前だと思っていることは当たり前ではないということを改めて考えさせられました。このことは中学時代から部活の顧問にも言われていましたが、それは親への感謝であったり、活動が有意義にできる環境に対することでしたが、今日澁澤さんがおっしゃっていたのは地球規模のことでありこのことをより深く考えていく必要があると感じました。この話を聞いてこれまでの自分を振り返ってみると、もし、今あるクーラー、電気、食料、ガスなどがなくなった時自分は絶対に生きていけないだろうと思いました。なぜなら今ある生活を当たり前と思い自分自身で生きていくための知識や情報、経験が全くないからです。今の僕は本来生物であるならば1番に考えなければならない、生きるということを完全に忘れ、今の環境に身を投げ入っていました。もし今日この話を聞かなかったら僕は本当に生きているという実感を忘れ生物とはかけ離れたものになっていたことでしょう。次に今でも印象に残っていることは豊かさや幸せは違うということとお金に翻訳できないものは価値がないということです。僕は中学時代からどうしたら将来お金持ちになれるだろうとばかり考えて結果として今の道に進みました。特になりたいものもなくテレビなどを見ていてお金持ちの人たちがとても大きい家に住んでいたり、誰もが羨ましがするようないい車に乗ったりいいものを食べたりしているのを見ると僕もそのようになりたいと思わざるをえません。小さい時からどうしたらお婆ちゃんやお母さんから大金をもぎ取れるだろうかということばかり考えて僕もお金に対しては命よりも大事なもののように思っていました。しかし最近本当にそうなのだろうかということを考え始めたころに今日の澁澤先生の話が僕の心をつかみました。幸せはお金や最新のテクノロジーの量ではない。本当の幸せはそんなものではない。そう感じさせられました。確かにお金も必要ではあるがそれよりもみんなが笑顔で暮らせること自分のしたいことができる、生きていけることが本当の幸せだなあと感じました。少し今日の話の内容からはそれたものになりましたがこのことが自分の心に残りました。そして柳先生もおっしゃっていましたが自分に子供ができて考えさせられることもあるのでこれから大人になるにつれていろいろなことを考えていけたらと思いました。そして自分はまだまだこどもだと思いました。

林拓翔：今日の講演で澁澤さんは私たちの世代で日本が大きく変わるだろうとおっしゃられましたが、本当にそうなったとしたら、「今まで通り」の考え方では通用なくなり、新しく自分たちが行動していかなければならないことに少し不安を覚えました。ですが、主体性ということが大事だというのはわかるので、これからはただ知識を覚えるだけでなく、自分から積極的に行動することを心がけようと思いました。また、最後の方に話されたことに関してですが、10歳と少ししか生きていない自分にはまだ本当の幸せや本当に大切なことはわかりません。誰かの役に立つことが幸せとありましたが、人それぞれ幸せなことや、大切なものは違うと思います。なので、これからの人生の中で自分にとっての幸せや大切なものを見つけたいと思います。澁澤さんが話された多くの内容の中には、環境のことなど私たちが未来の為考えていくべきことがたくさんあると思いました。それぞれについて自分自身で考え、行動して生きたいと思います。

春名高歩：90分があつという間に過ぎました。今の現代の人間の考えと、先代の人間の考え方の違いに気づけました。現代の資本主義社会の中では、お金の有無によって人の見方も変わってしまっていると思います。僕も実は、将来になりたい職業を収入によって判断していました。しかし、今回の講演で「日本は

豊かになったが、幸せになったかはわからない」という言葉を聞き書き、豊かになる事だけでは幸せになる事は出来ない事を知れました。お金に関わらず自分のやりたい事や、人の為になる職業を目指します。先代の人々は、何世代も後の子孫の事を考えていましたが、今の時代の人々は、自分と子供などの世代しか考えてないように思えます。それ故に50年という年月で石油を半分まで使ってしまったのだと思います。今までの生き方を変えていかねばならないと思いました。澁澤さんがお話しされた「今の時代に生まれて来た事をラッキーと思う」ようにします。僕達の世代が、世代と世代を繋ぎ現代の考え方を少しでも変える努力をし続けたいです。そして将来、自分なりの幸せがあるような生き方、「愛」とか「優しさ」とかを胸をはって語れる人間に成長していきたいです。

本城龍樹：90分という時間の中で、自分の考え方をがらりと変えられたような気がしました。色々、話を聞きましたが、正直な所上手く日本語で表現出来ません。また、まだ、はてなマークが頭の上にある感じです。ですが、柳先生や澁澤先生が仰っていたようにもう少し、人生を歩んでいけば、このはてなマークはいつかスッキリし先生の言っていたことが分かるように思いました。今日の話で一番理解出来たところは、私達人間は目先の利益ばかりを追い求めるあまり、環境の事を無視し、持ちつ持たれつの関係であった自然を破壊しているという所です。自分は将来エンジニアになりたいとゆう夢があり、国民の役に立つような物を作りたいと思っています。この話を聞いて、作った物が売れることも大切ですが、作る前にその作った物が今の地球の環境にどう影響を与えるのかしっかりと考えようと思いました。話は変わりますが今は自分なりに、自分の命について考えて生活していこうと思いました。

真野彰久：澁澤さんの話を聞いて、近年の人間の資源の消費量は自然の成長量を上回っているということが特に印象に残りました。日本人が当たり前だと思って生活することも、地球にとっては普通ではなく自然の許容量とのバランスを大きく崩していることがわかりました。これらのことから私たちは長期的には今までの生活は、維持できず新しい生活の方法について考えさせられました。現代の人と数十年前の人とで考え方が大きく変わり自給自足で生きてきた時代とは変わり今では他人に生かされているのにも関わらず人と人の関係が減っていることは残念だと思った持続可能な社会にしていくには個人で何ができるか考えていきたいと思いました。

山野晃平：澁澤さんの話を聞いて昔と今では考え方や生活、価値観など大きく違うとわかりました。自分が当たり前だと思っていることは地球にとっては当たり前ではないと言われたとき、自分はこれからなにをしていくべきなのかを考えさせられました。それは難しいと思いますがお金に翻訳できないものは価値がない、記録や結果が価値になる、という現代の考え方、価値観を少しずつ変えていくべきだと思います。そうすれば持続する社会になっていくと思いました。これから成長していく上でいろいろな体験をして幸せとはなにかを考え、自分が人の役に立っていると思えるような大人になっていきたいです。

相見真弥：今回の講演では「つながり」を主なテーマとしていました。自分の命が何とつながり、そして何に生かされているのかを知るとはとても大切だと分かりました。それを知ることは、結果的に地球が有限であることに気がつくところにつながるのではないかと思います。将来、安心して地球で暮らしていくために、生活様式、価値観を変えていかなければいけません。そのために、自分が何をしなければならぬのかをしっかりと考えてみたいです。

阿部仁美：澁澤さんの話は私にとってかなり衝撃でした。私はまさに、『お金に翻訳できないものは価値がない』と思っていて、お金を手に入れることが出来れば幸せになれるし、今は成績が良ければそれでいいんだと心底思っていました。今まで、周りの大人の誰にも、成績が良ければ褒められているし、そもそもM組がそういうクラスだからです。澁澤さんは、幸せになるには様々な繋がりが必要で、これからの社会をどうするかは私たちが考えなくてはいけないとおっしゃりました。そこで、やっと私が常々感じている無力感の正体がわかりました。私は一億三千万人のうちのたったひとりに過ぎないし、もし明日私が死んだとして、たぶんそう長い年月を経ないうちに私のことは誰の記憶からも消えるからです。でも今の、いき詰まって鬱屈した状況を打破する解決策のひとつを提示されて希望が湧いたのも事実です。そしてそれが、私が実現させようと一生懸命になっていた方向とはまるで違うベクトルの話だったのも本当です。だけど親も周りもお金に執心している中で、私だけみんなと違う方を向くのもそれはそれで躊躇してしまいます。私の将来をそう易々とねじ曲げることは出来ませんが、私はこの講演をひとつの幸せになる方法だと解釈して自分の中に落とし込む予定です。澁澤さんの言う時代の大転換の一部始終に飛び込むことは出来なくても、しっかり受け止めていこうと思います。

石井杏奈：今日の講演会をきいて、殺される心配、食べ物の心配がなく、自由に物を言える日本が、人間にとっての理想で、それが当たり前でないことに改めて気付かされました。私たちが当たり前だと思っていたこの生活が、50年、100年続くわけではないと思うと不安になります。また、お金が欲しい、欲望を満たしたい、という人間の気持ちが、今まで続いてきた歴史や伝統、世代と世代の関係を切っていると気づき、動揺しました。これから、私たち自身がその切られた関係を再び繋いでいくことが必要だと聞き、その言葉が強く印象に残りました。自分の生き方や幸せな生活とは何かを一度自分の中で考え、その考えを貫いていけるような大人になりたいです。

大谷妃向子：誇りを持って生きるという言葉聞いたとき、今後の人生についてもっと真剣に考えなければならぬと思いました。今の私の人生では誇りを持って生きているとは言えません。今の私では自給自足できる能力もないので、とりあえず何か一生懸命になれるものを見つけて、極めて、自分の誇りにしていこうと思います。ダム建設のときのお婆ちゃんの話にすごく感動しました。生きる為に自分の子供を殺さないといけない…しかし、せめて子供に家族の声を聞かせてやりたいと思い遺体は玄関に埋める。と聞いたとき、どんなに貧しくても、人の心はあたたかいのだと思いました。人の価値はお金ではなく、心なのだわかりました。5歳まで成長することが難しい時代が日本にもあったということを知りました。今、私はすごく幸せな生活をさせてもらっているのに何の感謝もしていないことがすごく恥ずかしく思えました。今後生きていく中で必ず、恩返しをしようと決めました。

金光帆乃香：今日の講演会を聞いて、一番印象に残っているのは先進国が問題で地球のこの先に未来はないというお話です。日本は暮らしを良くするために試行錯誤し、実現してきたために先進国と呼ばれ、他国からも評価される国となりました。自分でも日本に生まれたことを誇りに思っていました。日本のような先進国の実態は地球の利息以上の成長量を利用し自然を破壊している国なのだ学び、本当に誇りに思っている事なのか、今後さらに発展すると予想されるがそれは良い事なのか、強く考えさせられました。私は今を生きるのに精一杯で全然先が見られていませんが、きっと今後たくさん問題に直面し、悩むと思います。そんな時は今日のお話であったように、ゴールへの最短距離を目指すのではなく、自分の価値観をぶらさずに満足のいく選択をしていこうと思います。

WU YUE：日本人でも、中国人でも、どんな国の人でも、自分達の特有な文化を持っています。でも、現在の人々が「お金を翻訳できない活動の意味はない」と思うてしまうと、私たちが持っている特有な文化がだんだん薄れていく事例が最近増えています。それは私たち現代人によって引き起こされています。それはすごく悲しいことだと思いました。私は中学生のときに、教育支援のボランティアで、何度も中国の貧困な地区に行ったことがあります。その時見たのは、子供が都市で生きるために、もっと言うと、お金のために、病気になっても一生懸命に働いている親は決して少なくありませんでした。道中の赤ん坊が冷たくなったというお話を聞いたとき、私は泣いてしまいました。なぜかと言うと、ボランティア中に、そう言うことが何回も目の前で起こったからです。親がそんなに一生懸命に働いていることは本当に正しいのか、それともそうではないのかと考えました。まだ、今回のお話の中に将来47%の仕事が機械によって自動化されるという話がありました。つまり、今働いての人々は、いつか仕事がなくなる可能性が高いということです。仕事がなくなってしまう、自給自足の能力を持っていない人々は、どう生き続けていけば良いのかと考えるべきだと思います。自分がなんのために働くかをもう一度考え、人の役に立てるような生き方をしたいと思いました。

土井翠：とても興味深いお話でした。お金に翻訳できないものは価値がないと先進国のほとんどの人が思っているのはとても悲しい事だと思いました。今、私達は地球1.5個分の自然の成長量を使っている、というのにはとても驚きました。私たちが普通と思っていることは、地球にとっては普通ではないと言われて、私たち先進国の人々の生き方を私たちの世代で変えなければならない、と強く思いました。そのために、自分の命は周辺の命と繋がっていることを体感し、自分の価値観で自分の生活を作るという気持ちを持つ必要があるとの事でしたが、これを広範囲の人々に広げることは私たちには難しいと思います。けれど、私たち個人がまず価値観を変えて身近な人へと伝えることで、自然の利息だけで暮らすことができるようになると思います。それはずっと先になるかもしれないけれど、私たちはこの50年間で切ってしまった「関係性」をもう一度繋げられるよう、努力するしかないのだと思いました。これを「しんどいこと」と思わず、澁澤さんが仰っていたように、社会の大転換を見ることが出来てラッキーと思って頑張りたいです。三面の、風邪を引いた赤ん坊を一日走って病院まで連れていったけれど、その道中で熱かった赤ん坊が冷たくなっていったというお話と、自分が苦しい思いをして産んだけれど育てられないからと埋められる子どもを、せめて家族の声を聞かせてやりたいと玄関に埋めるという話には胸を打たれました。「優しさ」、「愛」、「慈しみ」といった誇りを持てるような生き方をしたいと思いました。そして最後に、私たちがどのようなことを幸せと思うのか、持続可能な社会とは何か、自分の生き方に自信を持てるような価値観とは何かを、これからするたくさんの経験と出会いの中で探しながら生きていきたいと思います。

服部蒔季：私が1番印象に残っているのは「ありがたさ」と「煩わしさ」は表と裏の関係であるためどちらも必要だというお話だ。これは私にとって家族の関係と似ているなと感じた。あと何より聞き書きをもっとしたいという気持ちでいっぱいだ。自然に関わる様々な人の生き方を知りたい。聞き書きは何のために生きるのか、幸せとは何かを考える時のヒントになるものなんだと思った。これからどんな道に進もうが地球には様々な繋がりがあるというのを忘れないように、その繋がりを自分で気づけるようにしたい。

福田楓：人類の未来のためには、違う価値観の社会を作らなければならないというお話には興味を持った。人の価値観を変えるには、価値を変えるような経験をすることが大切だと先生は仰っていた。私の家

は先祖代々農家をやっている。だから祖父母からよく昔の暮らしや考え方を聞いていた。今までは単なる知識として話を聞いていたが、今回の講演を通してその経験は私の大事な財産なんだと気づくことができた。現代の人は自然と縁のない生活をしている人が多く、自然の大切さやありがたみを感じる機会が少なくない。だから聞き書き甲子園がもっと広まってほしいと思った。私は聞き書きに参加しているので、このプロジェクトから多くのことを吸収してまずは、自分の価値観を磨きたいと思う。

藤本朱夏：澁澤さんの話をきいて、まずは私たちが今住んでいるこの社会に不安なことが多いのに驚いた。現在地球上でも環境問題などが深刻だがそれにしても多いと思う。私たちが社旗人になるころにはもっと増えているだろうし、講演の最初から不安になった。しかし、今度はそれでも信念をもちつづけていれば幸せになれるかもしれないと知った。私は不安なことがあるとすぐにクヨクヨしてしまうので、人間関係を大切にしながら強い意志で過ごせたらなと思った。

山本祐馬：先生のお話は過去のつながりや宗教的なつながりについて、これからの時代を生きていく自分たちに向けてお話して下さって、自分が一番印象に残っていることは「お金があるからといって幸せとは限らない、もしくは幸せにはなれない」ということ。自分の中ではお金さえあれば何も困らずに生活していけると思っていましたが、先生の「ヒトは支え合って生きていく生き物であり、一人では生きていけない」というお言葉を聞いて、そのまま、その通りだと飲み込むことはできなかったけど、少しそうかもと、と思えた。先生が実際に山村に赴いて、その地域の、お年寄りにお話を聞いた時のお話の中の、一人暮らしのお年寄りが地元の病院に野菜などをもって行って少しでもヒトの役に立ちたいという気持ちであるということを知り、とても感動的なお話だと思った。どんな小さく、弱い力でも人のためになれることが分かった。自分も将来ではなく、今からでもできる小さいことで人に役に立ちたいと思った。今日の先生のお話は、自分の価値観や考え方にとっても大きな影響を与えていただいたので、とてもすばらしい機会になったと思います。

岡崎裕文：今回の講演を聞いてあまり内容を理解することが出来ませんでした。しかしこの内容は自分が大人になると少しずつ分かってくるものだと思っていました。人と人との繋がりを意識して考えたことがなかったので本当によく考えさせられました。また今と昔を比べた時、現代は便利なものを求めすぎるため繋がりを失ってきている、これはよく考えるとそうだと思います。そして今自分がそのような状態にあるのだと感じました。この講演で今までの自分を見つめ、これからの自分について考える機会になりました。本当にありがとうございました。

下田伊織：今日の公演を聞いて自分はここ 50 年間のうちでいまの人間の考えの根底にある「働く＝お金を稼ぐこと」と言うことが確かに自分の中にも無意識のうちにあったことを認識した。内容が難しくて上手くは言えないが、昔の人が積み上げてきた概念はたしかに大事だけど、今の自分の中にある概念を変えていくのはやっぱり容易でないので、自分の中でその二つの概念が上手いように交わって行けたらベストなのかなと思った。昔の人の概念だけしか持って無かったら、自分は勉強しないんで(笑)

太田彩名：今の生活とバブル期前の生活を比べて考えたことは無かった。今日初めて考えてみて、私たちが当たり前としている暮らし方は、時代の流れから見ると当たり前ではないと気づくことが出来た。確かに言われてみれば、生きるために勉強しているというよりも、お金を稼ぐため勉強していた。本来の生き

るという目的を忘れていて、おかしいと思った。そんな狭い視野を変えていくべきだと強く思った。自分たちのことだけではなく、次の世代の事まで考える必要があると感じた。でも、はっきりと何をすればいいかは分からない。とりあえず、人の役に立つ事が出来たらいいなと思った。私も聞き書きやってみたい。

大森彩音：もしこのままの状態が続くと、地球が終わると話されていたことに関して、じゃあどうすればいいのかと考えても答えは出なかった。今の快適さを捨てずに地球の利息を作り出すのは無理なのではないか、地球存続には今の暮らしは犠牲にしないとイケないのか。私は勉強するときには冷房がないとやっていけない。でも、それ以外のことをするには暑さは我慢できる。だからやはり昔の人の暮らしを参考にするなら、何かを犠牲にする必要があるのかと思った。しかし、それをうまく変えていくという考えを生み出すのがこれからの私たちの仕事なんだろうなと思うと、大きすぎる課題であった。そのためには実際、科学の力も必要であるだろうと思う。やはり勉強は大事である。(?) こういうことも先進国だけでなく、途上国とともに考えないと意味がないなと思った。途上国はこれから先進国と同じ道を辿るはずだから。また、田舎の集落の話は自分を見直すいい機会になった。人間の生きる意味を始め、本来の人の繋がりを再認識できた。今色々な繋がり方がある中で、本来の繋がりを意識すれば、今のものもよりよくできるだろうと思う。

郭玉奇：澁澤先生の話聞いて、とても情報量が多くて良い経験になりました。現代社会の問題はほぼ農山村の問題や都市部の問題に別れていて、しかし、都市部で住んでいる人間も農山村で住んでいる人間は不安を感じる。その不安の根源はわれわれ人間がお金の世界で生きているから、人々はお金のため勉強したり、働いたり、生きている。しかし、この世界、この地球はお金がすべてではない。地球は一つしかない。地球が永遠にあり続けるならば、持続可能な社会を作るべきだと思う。持続可能な社会は必ず人と人、人と自然、人と社会が繋がることである。生活の質を向上するためには狭い視野を変えるべきだと思う。お金のためだけではなく、持続可能な社会、私達の子孫のことを考えないとイケない。昔の生活の質が低かったが、幸せと思った人が多い。現代社会、関係性喪失の原因で、「無縁社会」になって孤独を感じている現代人が多い。幸せな生活を求めるためには人と人のコミュニケーションも大切だと思う。

友次向日葵：私はよく考えたら自己実現のことしか考えてなくて、自己実現のためにずっと勉強していたので指摘されたことに対してハッとしました。次世代とのつながりは地球温暖化などの問題で考えなかったこともないけど、過去世代のごことは本当に考えたことはなかったし、受け継がないとイケない理由もわかっていなかった。でも、田舎のおじいちゃんたちの話、特に山の使い方や、どの水を使っているのかを子供たちに見せる話を聞いて、これは繋げていかないとイケないなと思った。また、地域医療はそのような人たちの健康な生活を守ることに役立つのかもしれないと思った。そこまで都会じゃないけど、岡山では都会の方にずっと住んでいて、結構冷めている私でも、この話はちゃんと響いた。だから都会の人は響かないと思わずにみんなで広めていってほしいと思った。

藤井祐天：講演を聞いて、私自身、稼ぐことが仕事だと思っていたし、そのための勉強をしている部分もあって、結局は全部目の前の目的や課題にしか頭が向いていないことに自分は本当に浅はかだなと感じた。よく考えれば気づきそうなことが自分の当たり前になっていて、とても不安に思った。技術の発展が人間のためになり、国、世界のためになると思い込み、私もそれに貢献したいと思ってきた。だけど、技術の発展は、その便利さが当たり前だという価値観を生んでしまう。それが今の自分で、将来は自分でその価

価値観を高めてしまうことになるかもしれないと気づき、ぞっとした。かといって今の技術をなくすと困るし、私は工学や科学の分野を学びたいと思っているし、難しい状況だなと感じた。また、この状況を何とかしようとする際に、価値観と欲は大きな課題になると思った。何にしても、私の情報量が皆無なのでもっと勉強しようと思った。お金のこととか、未だに株や為替の意味がまるでわかっていないし、売り上げが円高か円安かで変わるのも面倒だと思えないので、勉強しようと思った。

風早美結：私は講習を受けて、今の社会は「無縁社会」・「お金で買えない物は価値がない」など昔と比べて、考え方・人との繋がりが薄くなっていることが印象的でした。幸せとは豊かということではなくて、改めてお金が全てではないと感じました。最後に自分の経験を他者に共有することで繋がりを考える事が出来たり、実際に経験をすることで見方が変わるなどの話を聞いてこれからどんなことにも積極的になろうと思えました。そしてもっと人との繋がりと「支え合い」を大事にして生活しようと思えました。

久重龍雅：今回の講話で一番学んだところは、現代の生き方と昔(戦前)の生き方の違いでした。特に印象があったのは、自分の死んだ子供を門口に埋める村の習慣についての話でした。どこが印象的かということと門口に埋める理由でした。その理由は、家族の声が聞こえなかったら寂しいじゃないか。というものでした。これを聞いた時全身に鳥肌が立ちました。何故なら昔の人達はこんなにも互いが密接な関係であったという事が分かったからです。死んで終わりという生き方ではなかったからです。そして、この後の盆踊りの話を聞いて感動しました。とある村の盆踊りは、明かりを付けず踊ります。何故明かりを点けないのかというと、周りが暗く見えなくなります。そうした中で踊ると死んだ家族、友人、恋人と一緒に踊る事が出来るからです。こうした事を踏まえて僕は今一度、家族そして周りの人達との関係というものを見直そうと思えました。果たしてその関係が、世代と世代を繋ぎ、後の世代のためになる事、までとはいきませんが、誰かに覚えてもらえる、存在が確かにあったと言われるような人生を歩んで行きたいと思えました。

武久真依：今回の講演を通して私は、人間は支え合っていないと生きていけない生き物だということに改めて痛感しました。人は天然資源や他人に支えられながら生きているからです。自給率が低下した現代ではそういった意識を持つ人が少なくなっていることを知り、私は今日学んだことを次の世代に伝えなければいけないと感じました。また、人と関わることや生きるために何が必要かを考えることなど生活する上で大切なことも教えていただきました。貴重なお話を聞いて嬉しかったです。今日学んだことを生かしながらこれから生活していきたいです。そして次の世代に語り継いでいきたいと思えます。

栗正明奈：一番印象に残ったことは、子供が熱を出したら近くに病院がないため、病院がある場所まで一日から半日かけて歩いて行き、気付いたら子供が冷たくなっていったことです。以前の日本では、そのようなことがあったのだと思うと衝撃でした。300年前の木が、当たり前にあるのではなくて集落の人たちが守ってきたからこそあるのではないかと思いました。日本はこれから変わっていくと知ったので、伝統や守るべきものを繋ぎ直すのが私たちの役目なのではないのかなと思いました。また、私は受験生なので、大学に関することも聞けてよかったです。これからは、大学の4年間でどう器を作っていくのかを考えていきたいです。

太田雄翔：今日の講話でまず関心を持ったのは「生きること」への考え方が変わってきたという話でした。

今の人達は自分だけで、自分のために生きるという考え方の人が多い、これから皆が自分と他人で生きるという「繋がり」を重視した考え方を持つべきだと思います。そして最も興味を惹かれたのは人の自然に対する考え方についての話です。今の人達は昔と比べて自然を利用することに対して「当たり前」と思っているという話を聞いて少し驚きました。僕は生きていくなかで「自然で生きている」ではなく「自然と生きている」と思いながら暮らしてきました。これも自然との「繋がり」について考えさせられました。これからの未来、皆が価値観などの様々な「繋がり」について考えて生きる事こそが必要になっていくと思いました。

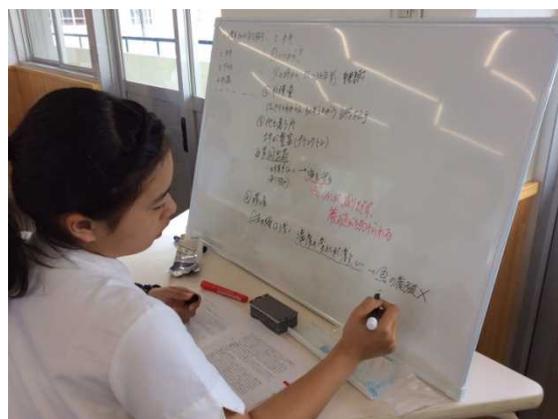
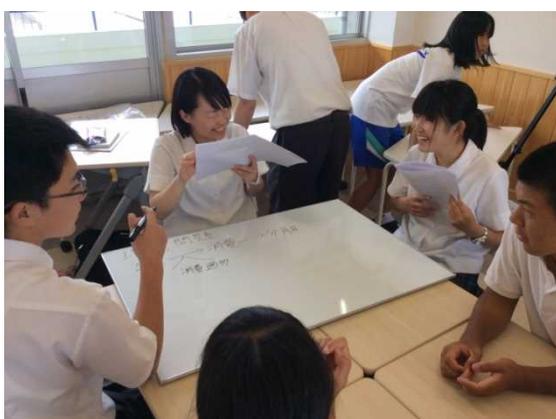
谷平絵梨：今回の講話で私が印象に残ったのは価値観を繋ぐという事です。講話の中で沢山「繋ぐ」というワードが出て来ました。これからの生活を繋ぐ、当たり前だったものを繋ぐ、世代と世代を繋ぐ…でも、価値観を繋ぐという事は価値観の押し付けになってしまうんじゃないか。というのが一番の疑問でした。その次に印象に残ったのは何のために生きるのかという事です。自分のために生きるのであれば、自分の事ばかり優先してしまう。他人のために生きてしまっは自分の考えが持てないと私は思いました。どちらを取ればいいのか正解はないと思いますが、「繋ぐ」という事を考えると他人のために生きる事が大切だと改めて思いました。

山地楓太：今回の話については、多くの疑問が残った。幸福になるために繋がりを大切にするはずが、繋がりを重視するあまり自由を失い、幸福でなくなっていることはないか、そもそも少しずつ別のものになっていく時点で、ある種繋がりは「無い」と言えるのではないか。しかし、多くの経験の末に、自然への感謝、そしてその重要性を感じた方のお話である以上、我々では想像もつかない想いもあるのだろう。少なくとも、我々がこの話を聞いて、繋がりについて考え、話し合うことは、非常に価値のあることであると私は感じる。

4) 日生中学校での聞き書き編集会議

8月29日(月)

聞き書きの内容を新聞としてまとめる中学生との協同学習。各グループごとにテープ起こしたテキストからどのようなテーマに絞り込むか、また、読んで貰う人に伝わりやすいようにどのような図表を作成するか、熱心に議論することができた。



生徒感想

飯塚朝葵：今日は、久々に、日生での授業でした。前回きていなかったぶん、すごく大変のように感じました。中学生と話し合っ決めていくのは、思っていた以上に時間がかかり、中学生との交流がとても大切な経験になりました。この2時間が、素晴らしいプレゼンテーションに繋がればいいなと思います。

竹内サラ：書き起こしたものを4つに分けて、新聞のレイアウトを考えました。そして、4つに分けたものの小見出しをそれぞれ考えました。タイトルも考えました。中学生と分担して効率よく作業することができたと思います。次の時も頑張って、いいものを作りたいです。

松下明香里：中学生と実際に打ち合わせすることで、意見を交換し合うことができ、どのようなことを新聞にまとめていくか明確にできたので良かったです。次の時に向けて頑張りたいです。

竹原和可子：中学生と新聞作りの打ち合わせをして新聞のレイアウトや分担を決めることが出来たので良かったです。新聞に入れる内容を整理していく中で聞き書きの時に聞いたことがはっきりしたので良かったです。より良い新聞になるように自分の分担のところをしっかりとまとめていきたいです。

阿ムエル：今回の中学生との新聞づくりでは、中学生と話しあい、お互いに意見を交換することで、新聞のレイアウトを決めることができました。これが大切な経験だと思います。

森本雄大：今日の新聞作りでは、中学生を主体に新聞全体の内容の整理や、分担、レイアウトなどと大まかな作業を終わらす事が出来ました。今度までに中学生のデータと自分達のデータを交換し、分担された箇所を多角的な視点でまとめていきたいです。

岡田翔伍：今日は新聞を作るために中学生とすりあわせをした。その中で聞き書きのときに自分が新聞に使えるようなやつを聞いていなかったと感じた。最初から自分がどういうテーマをするか考えておけばよかった。

砂子夕馬：中学生とすり合わせをするときには、やはり簡単な単語で伝える事が重要だと感じた。前回来ていなかった分、聞き書きの質問と応答を箇条書きにして、物事の連なりを把握することで、新聞作りが捗る事が分かった。また、純粋な意見交換の場としても大変有意義な時間で、より環境について考えようという意志が強まった。

竹田友希：今日は中学生と話し合いながら、新聞の内容などを考えていきました。内容を考えている時、中学生の子たちが難しそうにしている場面がいくつか見られたので、誰が読んでも分かりやすいような新聞を作っていけたらと思います。

細川美月：今回中学生と話をして、テーマや構成をしっかりと決めることができたので良かったと思います。これからさらに自分で整理し、中学生と良い新聞を作りたいです。

米澤葵：今日中学生と話しながら新聞について考えてみて、自分は分かるけど中学生にはわからないこと

というのがあって、伝えるのに苦戦したり、中学生から意見を聞き出すのに大変でした。しかし、時間が経つとちょっとずつ慣れてくれて、意見も言ってくれるようになって嬉しかったです。このテーマについて何かある？と聞くと予想してた答えとは違う答えが返ってきて、そんな考え方や見方もあるんだな、と感じました。また9月までに新聞を協力して作り、いい新聞にしたいと思います

魚橋江梨子：夏休み中に、テープ起こしをするだけでは、いまいち頭の中で整理出来ていなかった部分もあったのですが、今日、中学生たちとグループの中で話し合ううちに、ポイントをつかむことができたし、ある程度、頭の中で整理もできたので、よかったです。これから、実際に新聞をつくっていくのも、みんなと協力して満足できるものができるといいなと思いました。

川淵涼介：今日は、各自が提案したテーマをまとめて決めることができました。中学生に自分の意見を説明するために簡単な言葉を用いて伝えるのがとても難しかったです。これからは今回話し合ったポイントをうまく整理して素晴らしい新聞を作りたいです。

劉美辰：日生中学校で新聞の作成について話し合った。みんなと意見を交換して、レイアウトを作ったり、タイトルを決めたりしました。予想以上に円滑に進みました。みんなの協力のもとで、いろいろなアイデアが思い付きました、いい経験になったと思います。

福田紗弓：今日は、中学生と聞き書きについての話を進めた。聞き書きの内容には、似たような話題の内容の整理と要約をするのがかなり大変だった。そのため、新聞作りで中学生と分担した箇所の情報共有をしっかりと行っていきたい。聞き書きから文章を作る際に重要な話題等を書き落とさないように気を配りながらより良い新聞を作っていきたいと思う。

杉本祥太郎：自分たちでいちからテーマを出して作成するようなことはなかなか経験出来る事ではないので、吸収できるここはこれからしっかりしていきたい。中学生と僕たちが互いに成長出来る取り組みにしていきたい。

服部蒔季：どのようにして中学生、高校生の意見を比較し、交えて新聞に載せようかが1番の論点となった。質問した事項の取捨選択でもっと意見を出してもらえるように進行できたらよかったというのが反省点だ。それぞれの次までの課題まで話し合えたので、あとは具体的な作業をしていきたい。

福田楓：今回の話し合いでリーダーの大変さを実感した。高校生の意見をストップをかけずに聞いてしまうと、中学生には理解が難しく、付いてこれなくなる。だから高校生の意見をわかりやすくまとめつつ、話を聞いていかないといけない事や、その難しさを感じた。また、今日の一番の反省としては、中学生の発言の回数がとても少なかったことだ。たださえ、高校生がいて話しにくい中で自由に発言するのは不可能に近いと思う。そこで私がもっと頻繁に意見を求めたり、質問したり、理解できているか確認を取るべきだったと思う。良い経験になった

土井翠：人数が少ないこともあってか、話し合いは比較的スムーズに進んだように思う。全員が積極的に意見を出してくれて助かった。しかし、私が全員の意見をまとめるのが下手だった事が反省点だ。また、

中学生と高校生で意見が一致することが多いことが分かった。大まかな話し合いは出来たので、次は個々の細かい作業を頑張りたい。

春名高歩：もともと、人見知りというか初対面の人は、苦手でしたが、今回は自分なりによく頑張ったと思います。時間内にやることは、やりました。もっと中学生の意見を引き出すべきだったかなと感じています。

5) アマモ種取・種まき体験

10月18日(水)

回収した流れ藻を袋詰めしたものをカキ筏につるして成熟させること4ヶ月。海水で何度も洗って種を沈殿させ、集めたお米のようなアマモ種子を海に蒔く体験をした。また、一部の種を持ち帰り、アマモポットの作成や課題研究の実験材料として活用することにした。



生徒感想

飯塚朝葵：アマモの種取りと種まきを終えて。一言で今日の経験を伝えるとするならば、楽しかった！というのがまず第一声です。どちらも今までにしたことがない経験だったので、楽しくて仕方ありませんでした！アマモの種取りでは、何度も何度も水で洗うことで、アマモの種を沈殿させ、軽い葉っぱや、なかなか発芽しないであろう軽いアマモの種を浮かせることで、種を取るということに感動しました。二か月前までは、ただ漠然と「種を取るのだなあ」と、思っただけだったので、この取り方を教えてもらい、自らやってみて、アマモって、人の手間がかかっている、そうすることで、日生の海は保たれているのだなと感じました。漁師さんたちの手馴れた感じがまた魅力的で、手慣れていても、雑というわけではなくて、淡々と仕事をこなしていく姿に憧れを覚えました。初めての経験でとても緊張していたのですが、ど

んどん上澄み液が綺麗になって、たくさんのアマモの種が見えた時は、大げさかもしれませんが、感動しました。アマモの種まきでは、前日も見た日生の海をまた船で行き来したのですが、何度見ても綺麗で、空気が澄んでいる感じが本当に毎回来る度にすきになります！自分たちが綺麗にしたアマモを海にまく瞬間は、またこの子達が大きくなるのかなと思うと、とてもドキドキしました。自分のこれからのためにも、今回の経験もとても大切なものとなりました

竹内サラ：今日はめったにできない貴重な経験をすることができました。自分たちで回収した流れ藻をさらって、海に巻くことで次の世代に続いていくんだなぁと実感しました。
船に乗せていただいて、とても楽しかったです。とてもいい経験となりました！

森本雄大：今日は日生中の生徒とアマモの種の回収と種まきをすることができました。実際にやったから分かるアマモ再生活動の苦労を身をもって知ることができました。また、めったに乗ることができない船にも乗ることができ、とても楽しく貴重な時間が過ごせたなと思いました。

松下明香里：今日のアマモの種取りではどのようにしてアマモの種を取っているのかがわかってすごいなと思いました。また、種まきをしたとき、なかなか乗ることのできない船に乗ることができて、とても楽しかったです。とても良い経験になったなと思います。

米澤葵：今日は、2回目の船に乗り、アマモの種をまいて、アマモが増えてくれるといいな。と思いました。また春(?)に来るときには大きくなって欲しいです。実際に自分でアマモを洗って、種がどれなのか初めて分かったし、アマモを隠れ家、住处とする小魚以外の生物が多くいて、これはどんな生物なんだろう??と見ていて楽しかったです。今までの日生の海洋学習の中で実感が湧く研修でした。とても貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました

魚橋江梨子：アマモから種を取り出す作業は、初めてだったけどきれいに取り出すことができて良かったです。アマモの種は、米粒みたいな形と硬さで、米を研いでいるような感覚でした。船も、漁師さんがわざと跳ねさせたりして下さって楽しかったし、もうあまり体験できないような事がたくさんできて良かったです。今回、1から作業して撒いた種が、育ち、アマモになって、日生の海がもっと豊かになるといいなと思いました。

竹原和可子：今日はとても貴重な体験が出来ました。種取りは1つずつとっていくのかなと思っていただけだと思っていた以上に1つ1つが小さくて海水で洗ってとる方法はすごいなと思いました。種まきでは自分たちが取った種でまたアマモが大きくなって少しでも海がきれいになったり魚が住みやすい環境になったらいいなと思いました。この経験を少しでもこれからは生かしていけたらいいなと思います。

細川美月：アマモの種の採取や種まきをするのはとても楽しかったです。種の選別では、種が重いことを利用して、ゴミと種を分けるだけでなく成熟した種を未熟な種と分けることもできるのだと知り、なるほど、と思いました。また、ひとつの籠にかなりの量の種があり驚きました。籠の中にはいろいろな生物がいて、それを見るのも楽しかったです。種まきでは普段あまり乗ることのできない船に乗ることができ、貴重な体験ができて良かったです。

福田紗弓：今日は、5月にとり、熟成させていたアマモの種を選別した。その際に、色々な生物が泥の中に混ざっていたため、アマモは小魚などの住処になっているということを自分の目で見る事ができて良かった。写真で見るよりも実際に見た方が沢山の種類の生物がアマモを住処にしているという事が分かりとても面白かった。ユムシや、ホヤの仲間などが特に多くいた。水の上を滑るように泳いでいる生物も多く見られた。正直、気持ち悪かったがこれらの生物も海のサイクルを守っているんだなと思うと奥が深いなと思う。そして今日蒔いたアマモの種が成長し、また小魚たちの住処になり、大きく成長してくれたら嬉しいと思った。船に乗ってこのような体験が出来て本当に良かった。中学生との新聞作りも順調に進んでおり、素早く確認する事が出来た。今日は本当にありがとうございました。

劉美辰：今回は種の洗浄作業と種まきをしました。とても貴重な経験でした。アマモの種取りの作業をした時は、だんだんコツを掴んで、うまくできました。取り出した種は全部袋に入れて、持って帰りました。とても達成感がありました。アマモの種を撒いた時は、この辺の海はもっときれいになるかなあと思いました。人が自然から恩恵をもらうばかりではなく、人からも自然をよくするために、何かをしなければならぬ。生態の循環をずっとお互いに助けあって行きたいと思います。

川淵涼介：今回のアマモの種の洗浄では、中学生と一緒に種を取り出しました。中学生は、まだ経験がなく何をしていたかわからなかったのが経験者である僕が教えてあげながら協力して出来たのでとても良かったです。また、種まきでは中学生と会話しながら楽しくできたので良かったです。今回、僕達がまいた種からたくさんのアマモが育ち、日生の海をより綺麗にしてくれたらとても嬉しいです。

竹田友希：今日はアマモの種取りや種まきを行いました。アマモの種を洗浄している時にユムシやホヤの仲間など、たくさんの小さな生き物たちを見つけました。普段、このような海の生物と触れ合う機会はないので貴重な体験となりました。また、アマモの種を撒きに行く時に乗った船もなかなか乗ることがないので、とても楽しかったです。水面に近いので、海がよく見えていいなと思います。海洋学習を始めた頃は、海に種をまくという事に驚きましたが、今日私もその一部に携われたのは良い経験となりました。この種が立派に成長して、日生の海をより豊かにしてくれたらと思います。

アムエル：今回のアマモの種の洗浄作業では、色々な生物が泥の中に混ざっているのを見つけて、アマモが小魚などの生き物にとってとても重要な存在だということが分かりました。そして、自分もアマモ再生活動や海の環境保護に貢献できて、すごく嬉しかったです。

アマモの種播きでは、空気が澄んで、海が綺麗でした。船に乗って、絵のような景色を見ると、頭に「長風浪を破るに會ず時有り、直に雲帆を掛けて滄海を濟らん」という詩が浮かんで、胸が高鳴りました。アマモの種を播く時、我々人間は、ただ自然の恩恵を貰うだけではなく、自然をよくするために努力を尽くすべきだと思いました。今回の経験はとても大切だと思います。ありがとうございました。

杉本祥太郎：今日洗浄したアマモは3ヶ月前の面影はなくなってヘドロのようになっていました。素手だったので少し躊躇したけれど、アマモ再生活動の集大成だと思い夢中で洗いました。種まきでは数百粒の種を中学生たちと一緒にまきました。この活動で日生の海が豊かになれば本望です。

岡田祥吾：今日はアマモの種まきをした。その準備としていい程度に腐ったアマモから種を取り出す作業をした。腐ったアマモの感触はまるで田植えをするときの田んぼの泥のようだった。なかなか気持ち良かった。作業をしていると別の人達のアマモの中からカニや芋虫が出てくることがあった。やはり腐ったアマモには栄養が多く含まれているのだと思った。そうして種を取り出したあと海に出てアマモの種と種を取り除いた腐ったアマモを海にまいた。まいた種からアマモが芽生え、日生の海を豊かにしていってくれととても嬉しい。また、ふと海を眺めているとゴミが漂っているのが見えた。きれいな海を作っていくことを目標に活動しているのにゴミを海に捨てる人がいるから海はなかなかきれいにならず、豊かにもならないと残念に思った。これまでの一連の経験はこれからはなかなかできない貴重なものだった。これからのために大事にしていきたい。ありがとうございました。

砂子夕馬：今日は、短い時間であったが、選別する過程で、知らない生物を発見したり、生き物の背景を肌で触れ感じた。しかしそれだけではなく、乗船の際に運んだ種の他にも、人が棄てたと思わしき物が泥に隠れていた。大海に沈むほんの少しの泥に、偶然混入している訳ではない。人が生きる過程で生み出されたゴミや海洋の問題は、出来る限りの力で解決をしていきたい。そう決意を改め、アマモの種をまくことが出来た。自然の恩恵を五感で感じる経験に巡り会えた事、それに協力してくれた方々に感謝し、すすくとアマモが成長してくれれば良いと思う。

服部蒔季：アマモの種を取るのこんなに大変なことだとわかった。ミミズとかクラゲとかがいてかわいかった。初めて船に乗って日生の海をととても近く感じられた。風をきって気持ちよかったし、貴重な体験になった。自分たちで種を蒔き、これから成長して魚がいっぱいの豊かな海を作ってほしいと思う。今日は種取り作業や船の時に中学生とたくさんたわいもない話をして楽しかった。

福田楓：アマモの種取りは地道に一個ずつではなく、水の中で泥を落とすのと同時に落とすのを初めて知った。いろんな人に「うまいねー！」と褒めてもらって、素直に嬉しかった。船に乗るのは久しぶりでとても気持ちよかった。種まきも中学生と楽しくできてよかった。今回の活動が海を綺麗にする一歩になったと思うので、これからも続けていってもらいたい。

土井翠：アマモの種を綺麗に洗う作業は腰が痛くてとても大変だった。しかし、洗う前のアマモが柔らかくて気持ちよく、できたアマモの種が小さくて可愛かったので興奮した。そして、アマモの種を撒くために初めて船に乗った。波の上を船で走るのはたくさん揺れてとても楽しかった。風が気持ちよかった。先生が、海が活着ているようだと仰っていたが、本当にその通りだと思った。穏やかな海が揺れているのは、海が笑っているように感じた。アマモを撒くとき、海に落ちたときのアマモの音が可愛くて面白かった。ちゃんと育っているのを見られたらいいなと思う。聞き書きの打ち合わせも順調に進んでよかった。良い新聞が作れたらいいと思う。

春名高歩：アマモの種の採集から散布までの工程を通して学習する事が出来て良かったです。また、実際に船に乗って移動する事は山人の僕にとっては、初めてでした。自分の人生やこれからの活動にとっていい経験となりました。船に乗る感覚も掴めて楽しかったです。身近な海と触れ合う事の大切さが分かりました。

作野竜人：アマモの種選別の時色んな生き物がいて面白かった。滅多に見られるもんじゃないからよかった。船は外の風を感じることでできる乗り物で酔うことが無く気持ちよかった。

6) アマモポット作成・アマモ学習講演

10月26日(木)

NPO 法人里海づくり研究会の田中丈裕氏にご指導頂いて、アマモポット作成を行った。ポット中の砂が含む空気が発芽を抑制するために、割り箸を用いて抜くことなど、細かい工夫が必要な行程であった。課題研究用のアマモポッドも作成することが出来た。また、田中氏にアマモに関する最新知見をご講演頂き、流れ藻に殺藻成分が含まれることなどを知って生徒はさらに興味・関心を深めることが出来た。



生徒感想

竹内サラ：1番心に残った言葉はアマモは海のゆりかごということです。アマモがあることで、稚魚とかが、成長しやすくなっているということが分かりました。アマモが、うまく生えたらいいなと思いました。

魚橋江梨子：アマモは、水温を調節したり、生き物の大切な住処や子育て場所になったりと、海の環境を守る上でかけがえのないものなのだ、田中さんの話を聞いて改めて感じました。自分達が集めた種を、自分達の手で植えて、成長させていくという体験はあまりできないので、ちゃんと育てて、来年、海に植えて繁殖させるのが楽しみです。

松下明香里：田中さんの講義を聞き、アマモがどれだけ海に影響を与えているのかがよくわかりました。今日植えた種がちゃんと発芽して、見せてもらった写真みたいに成長して行ってほしいなと思いました。

岡田祥吾：今日のアマモについての講義で、アマモがどのように海に恩恵をもたらしているか、具体的によくわかりました。特にアマモが海水温を下げることに働くこと知り、とても驚きました。今回の講義でさらに海に興味がわきました。これからの日生での活動にも積極的に取り組んでいきたいと思いました。

砂子夕馬：まず最初に、アマモについての講義があった。その時、アマモが海に対しどのように、又どれ程良い影響を与えているのかを知る事ができた。具体的に興味が深くなった内容としては、アマモ自体が海洋生物の棲む場所となり、消波の役割を果たす点である。海洋生物の生息圏減少と、波浪に対し対策をとる有効な手段であると感じた。これを踏まえた上でアマモポット作成に取り組んだため、より意味を持った時間を体験できた。私達の活動が海の保全に役立つ事を実感しながら、これからアマモの成長を見守って行きたいと思っている。

米澤葵：アマモポットを作成して、アマモが実生する条件や環境について知ることができ、新たに知識が得られました。そして、世界中に生息しているアマモは世界中で必要な存在なんだと分かりました。アマモが海に対してどれだけ良い影響を与えられるのかを学び、日生の海にアマモを増やす事が出来たらいいなと思いました。今日はありがとうございました。

竹原和可子：田中さんのお話を聞いて、アマモがどれだけ海にとって良いものなのかが分かりました。また、その活動を自分達ができているだと思うと少し嬉しかったです。自分達がとったアマモの種から発芽して日生の海にアマモを増やすことが出来たらいいなと思います。

細川美月：アマモの話聞き、アマモはとてもすごい植物なのだと分かりました。アマモが光合成をすることで酸素が増えることや、魚の隠れ家になっていることなどは知っていたのですが、アマモが海水温が上昇するのを抑制したり、赤潮の発生を抑制していることは知りませんでした。なので、話を聞いてとても面白かったし勉強になりました。また、アマモポットを作るのはとても楽しかったです。良い経験ができたと思います。

竹田友希：私は今日アマモポットの作成をしていた時、田中さんが聞き書きで、「アマモの再生活動に取り組み出した当時は、アマモを生やす技術が全くなかった」と仰っていたのを思い出しました。私たちは説明を聞きながらアマモポットを作成しましたが、これが0からの出発だったら、と思うと感動しました。今日植えたアマモの成長がとても楽しみです。

福田紗弓：今日は、田中さんに、アマモについての講義とアマモポットの制作の仕方を教えていただいた。家で花の種を蒔く時は土の空気をあまり抜かないが、アマモの種を蒔く時は土の空気を抜いてから植えないと発芽しにくいという事が驚きだった。そして、直射日光も避けた方が良いという事も、普通の種蒔きと違う点で、面白いと思った。先日、日生の海へアマモの種を蒔いた時のように一度で広範囲に種を蒔くと、アマモの種が重なったりして育ち方に偏りが出そうだったため、今回のアマモポットのように、苗が育ってから海に植えた方が、大変だが良いのではないかと思った。今日アマモポットに蒔いた種が苗になり、海へ植える日が待ち遠しい。

森本雄大：田中さんの話を聞くことで、アマモにおける知識を復習することができるとともに、新しいアマモに関する情報も詳しく知ることが出来ました。とても充実した時間を過ごすことが出来ました。

飯塚朝葵：今日の講義の時間はとても有意義なものとなりました。自分の知らなかったアマモの新しい利点を沢山知り、改めて、この活動にとっても意味があるのだと感じました。

特に、CO₂ を固定することに、とても驚きました。もしも、このアマモ活動が全世界でより積極的に行われるようになれば、私たちの暮らしは、より良いものとなり、有限のある地球をより効率よく利用できるのではないかと感じました。

服部蒔季：今日は貴重な時間を割いていただきありがとうございました。今までインターネットで調べたり、聞き書きをしたり、実際に船に乗って種まきをしたりしてきました。ですが今日新たにアマモの CO₂ を吸収するブルーカーボンとしての働きを知りました。地球温暖化による水温上昇の抑制の効果もあると知り、アマモが海に及ぼす影響の大きさを改めて感じました。作ったアマモポットでアマモが成長していく過程を観察し、日生と九幡での違いを比較していきたいです。アマモが大きく成長して栄養豊富な海のため少しでも力になれば良いと思います。

春名高歩：今日は誠にありがとうございました。自分は、アマモの研究をしたり、アマモ場再生をしている漁師さんのお話を聞いて来ました。しかし、アマモが海に及ぼす影響を抽象的にしか理解していませんでした。今日のお話を聞いて、具体的な内容を知り、アマモの凄さを改めて知ることが出来ました。また、これから研究するアマモポットの作り方を教えて頂きました。アマモが発芽するまでの数日間を楽しみに待ちながら、独自にアマモについてもっと調べていこうと思います。

土井翠：今日は私達に貴重な講義をしていただきありがとうございました。私はこの講義を聞いて、私が想像していた以上にアマモが海にたくさんの影響を及ぼしていることに驚きました。ブルーカーボンとしての働きには特に驚きました。また、アマモの重要性を改めて感じる事ができ、今後のアマモに関する研究や活動により一層積極的に取り組もうと思いました。そして、この取り組みによってアマモ場再生に貢献できたらなと思います。

作野竜人：アマモの自分のまだ調べられてなかった新しい情報を知ることが出来て良かった。アマモの海へ、地上全体への影響の大きさを知ることは今後の研究のモチベーションアップに繋がった。アマモが地上へ良い影響を与えることはよく分かった。しかしどこでもアマモを植えてもいいのか。その事も気になりました別の機会でも見たいと思った。

7) 木村尚先生講演会

12月23日(木)

日生中学校で開催された海洋教育講演会に参加。鉄腕ダッシュでも有名な海洋研究家の木村尚先生から東京湾や横浜での取り組みについてご講演頂き、市民が海に関心を持つための様々な仕掛けについて学ぶことが出来た。

生徒感想

飯塚朝葵：今日の木村尚先生のお話をお聞きして、アマモ場の意義を再確認することが出来ました。小魚

の住処を作って、海を豊かにするだけでなく、その地域の間人間関係まで豊かにすることが出来ることに気づくことが出来、また、私の中でも、その話を聞いて、海について学ぼうという意欲がより強くなりました。「1人の人が百万本の苗を植えるより、百万人の人が1本の苗を植える」ことにこそ意味があるという言葉は本当に心に響きましたし、そうあるために、今私たちが取り組むべきことは、海の必要性に気づき、それをたくさんの人に伝えることだと思えることが出来ました。このお話を、逆に捉えて、人と人との関係を良くすることで、そこにある自然も、より良いものになるはずなので、ミャンマーへ行った時には、コミュニケーションをとる上で、アマモのことなども話の中に組み込み、自分の取り組みを話すことで、ミャンマーの人達にもいろんなことを伝えられればいいなと思っています！

竹原和可子：私は今日の木村先生の講演を聞いてアマモの活動は人と人を繋げるということが印象に残りました。今までは海をキレイにしたり人と自然を繋げていたりすると思っていたけど地域の繋がりを強くするなどのアマモを植える活動までの過程や活動後の方が大切なんだとわかりました。自分達から積極的に動き、自分なりの考え方、広げ方で伝えていく事を大切にしようと思いました。

松下明香里：木村さんの講演を聞いて、人と人、人と自然を繋いでいくには誰かがやってくれると考えるのではなく、自分で考えることとみんなで助け合っていくことが大切であるということがよくわかりました。また、人と自然が離れてしまい、人と人との関係が希薄になっているという話で、川の人たちは海の人たちのおかげ、海の人たちは川の人たちのおかげだと互いに言い合っているのが本当に素敵だと思いました。これからは今日学んだことを活かして自己責任をしっかりと持って行動していこうと思いました。

森末雄大：今日の木村先生の講義の中でもっとも感銘を受けたものとしては、「東京湾の環境を改善するには東京に住む人全員が一人一本のアマモを植えることがもっとも効率よく効果的である」という点で、全員で環境に関して意識する事ですぐに海は良くなるといったように、パッと見悪い状況下にあっても、ものの考え方や見方を変えることで、より効率よく効果的な手段になりうるということがわかりました。今回学んだ事を生かして、積極的に自分の意見を伝えていきたいと思います。

細川美月：今日木村さんの話を聞いて、アマモ場などの再生活動はアマモの再生だけでなく、地域の人同士のつながりを深めることにもつながるのだと知りました。また、一人が百本植えるより、百人が一本植えるほうが効率が良く人と人のつながりが深くなるという話を聞き、一人が頑張るのではなく、多くの人々が協力しあいながらひとつのことをやっていくことが大切なのだと感じました。木村さんが「人と人、海と人の関係が途絶えていくような生活は長くは続かず、海に大きな影響があれば必ず私たちにも帰ってくる。何か絶滅すると、その影響が人間にも及ぶことを忘れてはいけない。」と言っているのを聞いて、今まで、動物が絶滅したことを聞いても「残念だな」と他人事でしたがそうではないことを知り、なんとなく危機を感じました。この先、今日学んだことを忘れず他のことにもいかしていきたいと思います。

福田紗弓：今日の講演で、木村先生がおっしゃっていたように、海洋学習で行なっているアマモの活動は人間が自然と繋がり合うことによってできている活動だと改めて思いました。たとえアマモを植えたいと思っても、アマモや海との関わりなどがなかったらできなかった活動なので、人と人の繋がりも大切だが、自然との繋がりもこれからも大切にしていきたいと思いました。そして、これから積極的にこのような活動などに参加して、今日の講演をしっかりと生かしていきたいと思います。

阿ムエル：今日の木村先生の講演を聞いて、アマモ再生活動は海の環境を守ると同時に、その地域の人々の繋がりを深める作用があると知りました。人間は自分の生活をよくする時、自分も動物であり、自然の一部であると忘れてはいけないと思いました。そして、「一人が木を千本植えるのは難しいが、千人が一人一人一本植えるのが効率的である」と言う考え方がとても素晴らしいと思いました。今後もこの考え方を活かして、問題を解決して行きたいと思います。

劉美辰：今回の講演会で、木村尚さんからアマモ場の再生について話をしてもらって、これからのすべきことにとっても啓発になったと思います。木村さんが言ったように、海を守るため、研究会の少数の人でコツコツやるだけではなくて、できるだけ多くの人を動員して、みんなの力を貸して、一緒に頑張っていくという考え方が大切だと思います。このように思って、木村さんが人づくりを活動の中心として、宣伝の活動をいっぱいしました。こうして、3000万人を取り込むことができました。この一人一人が少しのことをするだけでも海の保護にすごい効果になるんじゃないかと思います。やりたいことを、みんなに伝えることの大切さを感じました。

砂子夕馬：今日の講演を通して、環境保全の意義を、より深く理解できた。しかし、理解するだけでなく、出来る限りの主体性をもって保全推進の当事者へ近づこうと思った。それはひとえに、和をするためである。良い社会をつくる。持続可能な社会をつくるというのは、人と人との繋がりを保つ事が大切であり、「誰かがやる」ではなく「全員でやる」ことが必要だ。只、必要に駆られて社会を築き上げるのではなく、楽しさと興味を惹き込む過程と意識にこそ真の道であろう。また人間本位の行動でなく、生物としてもそのような考えを巡らせる様になると、生態系全体の多様性をも保全出来る。「個」を強い我で特別な存在と捉えず、「全」の一部とする意識下で初めて認め合って生きる能力が身に付く。差別や偏見の一切を取り払い、楽しく関わりをつくる。これが根源であり、理想だと付度した。アマモ場をつくっていくには協力を募る事が大事だから、現代社会の情報をきちんと受け取り、また発信していこうと思う。

岡田翔伍：今日の講演では人間が今どれ程環境について考えていないかを感じた。「人間は自然の中で生きており、自然の一部である」ということを忘れていているというのは今の社会からはひしひしと感じられる。大量生産、大量消費、大量廃棄など、人間は何様のつもりなのだと思うようなことは今の社会にはありふれている。そのようになってしまったのは、社会が豊かになり自然に触れずとも人と繋がらずとも、生きていけると勘違いしたからだと思う。持続可能な社会を作るためにはまず、自分たちが生きていけるのは身の回りの自然環境や人々のおかげであると認識する事が必要だと思った。

杉本祥太郎：僕は鉄腕 DASH が好きで、よく見えています。アマモの再生活動をしながら、これ DASH 海岸に似てるな～と思っていたのですが、まさか木村さんにお会いできるとは思っていませんでした。木村さんもおっしゃっていましたが、ある活動が世間に認められ、浸透するまでには沢山の時間と努力が必要だと思います。アマモ再生活動で先輩方が築いてきた事を僕達がしっかり受け継いで後輩達に伝えていくことの大切さを改めて感じました。

川淵涼介：今回の木村先生の講話を通して僕が一番凄いと思ったことは、木村先生たち NPO 法人が自然と人、また自然を介して人と人をつなぐはたらきがあることです。今日、重要視されている自然と人間の共

存のさきがけとなる活動を行っていて本当に凄と思います。

また、木村先生が講話の最後の方におっしゃった僕達に出来ることで、僕はいつも海の環境を破壊しないために行うことでポイ捨てをしないや生活排水をなるべく減らすなどを上げていましたが、木村先生はそんな在り来りな事ではなく僕達に色々な人達のところに行って自分たちの経験や講師の方たちが僕達に伝えてくれたことを直接対談して伝えて欲しいとおっしゃったことにとっても共感しました。僕はこれからの活動で今まで行ってきた海洋学習の事をまず周囲の人たちに様々な形で伝えたいと思います。そして段々と復活してきた瀬戸内海を何十年、何百年ときれいに保っていきたいです。

米澤葵：木村さんの話を聞いて、私達が参加している日生のアマモプロジェクトは凄いものなんだと驚きました。木村さんは東京湾を復活させる為に様々な活動をしていて、その方に直接お話を聞いて、東京湾ではどんなプロジェクトをしているのかとか、プロジェクトに対する考え方など、自分には無い新たな考え方を沢山知る事ができたのでとても良い経験になりました。私は海洋学習に何度か参加して、海についてより考える事ができるようになって来たのですが、海に対する興味関心を、一般の人に向けてもらうと言うのは難しいと思いました。強要しては意味がなく、一般の人達が自らやりたい!!海をより良くしたい!!と思えば海はすぐキレイになると言う話を聞いて、そうだなあ、と思いました。鉄腕 DASH で宣伝されて東京湾はキレイになってきていると思うのですが、それが他の海で出来るのかと思うと難しいなとも思いました。日生の海は比較的地域の人が積極的に海に関わり、改善しようと活動しているので、良い地域の環境なんだと思い、その活動に参加させて頂けて幸せだと感じました。大人になってもその様な活動、プロジェクトに参加したいと強く思いました。東京からわざわざお越しいただきありがとうございます。

服部蒔季：今日の講演で五感の聴覚を例にして自然が生きていないと人間の DNA がちゃんと機能しないという研究結果があるという話に驚きました。だから人と自然の繋がりが大切なんだと新しい見方からわかりました。また現代の分類されたシステムのスキマを埋める役割の必要性に気づくことが出来ました。「諦めない、続ける、つなげる、紡ぐ」の精神を心に留めておきたいです。

福田楓：今日の木村先生の講演で改めて人との繋がりの重要さを感じた。地域の人とつながることで、共有物を大切にシブラスの気遣いをしあえる。このことは、地元にいる頃から本当に大事なことだと感じていた。今回の講演で印象的だったのがその繋がりが、自分の活動に役立つということだ。自分の将来のためにも、色々な分野へ人脈を広げていこうと思った。

作野竜人：今日の話で私は人に手伝ってもらうことの難しさを改めて感じた。やはり人の助けを借りる為には明確なリターンを示さなくてはならないと思った。しかし多くの人手が必要な時がそれであり、少数の時は興味のある人間で集まった方がいいのかなと思った。あと、もう少し人に興味を持とうと思った。

春名高歩：今日の話で、みんなで同じ目標を持ち同じ気持ちで問題に挑む事の大切さを知れました。どんなものでもまず楽しい気持ちを忘れない事を理解しました。私はアマモについて現在研究しています。この研究が少しでも日本の海に貢献できるように頑張ります。アマモについて、まず周りの人に教えて見ようと思います。そこから繋がりを持ち、色々な人とかわり合いながら、日々を生きていたいと思いました。とても参考になりました。ありがとうございます。

土井翠：今日聞いた講演で、人と海との繋がりだけでなく、人と人との繋がりもとても大切だということが分かった。アマモ場再生活動を数人でして、それを地域ぐるみでしようと思っても人と人との繋がりが希薄であればあるほどそれは難しくなる。また、「アマモを植えた」という事実が大切なのではなく、「誰がどんな思いでアマモを植えたか」が大切だ、というお話はとても共感した。これからの私たちの活動で、人と人との繋がりがもっと深まり、それにより人と海との繋がりが濃密になっていけばいいなと思った。

8) 柳哲雄博士講演会

1月26日(金)

里海提唱者の柳哲雄博士をお招きし、「瀬戸内から世界へ発信する里海」と題してご講演頂いた。人間が適度に手を加えて生物多様性を高める「里海」という概念を、長年の研究や取り組みから興味深く教えて頂くことが出来た。



生徒感想

岡田翔伍：「里海」という言葉は、今でこそ世界でメジャーなものだが、十数年前までは全く使われていなかったと知った。しかもアメリカの学会では受け入れられず、国内でも他大学のの人に批判されたりしていたと知った。そうなったのは柳哲雄教授が、自分は正しいと証明しようと、または「里海」という考えを広めようとたゆまぬ努力を続けてきたからだと思った。：また、教授がおっしゃっていた「やりたいことをやりたいときにやるのが大切」というのはそのとおりだと思った。そのときにやらないと決心がにぶるし、その事に向かう姿勢も変わってくる。私はその事が勉強でも部活でもできていないので、これからはその事を意識していこうと思った。

竹内サラ：柳哲雄教授は里海を広めるために多大なる努力をされ、今も継続されていることに、驚きと尊敬の念が芽生えました。欧米の方や、他大学の方に批判されたとしても自分の考えをしっかりと持ち続けら

れたこともすごいと思いました。これからの未来自然と人間の新しい共存の仕方が必要なのだと分かりました。

砂子夕馬：今回お話を聞いてみると、はっとさせられた部分がある。それは、人間がうまく手を加える事によって生物多様性を生み出せるというものだ。勿論、人間の行動は環境に害を与える事があるのだが、極相に至る前に適度な攪乱を与えて、多様性をつくるという説明には深く感銘を受けた。環境は保存するよりも、保全するのに重きを置くことが重要だと推察した。私達が参加しているアマモ再生活動は、読んで字の如く元の状態へと再生している活動だ。アマモという生物が住まう環境のおかげで、私達は魚を食べられて感謝を抱くと共に、それは人の手で守られていくべき海の宝だとも思っている。生産力だけに目を向け、生物やそれらの周りにある環境を疎かにしては、無意味どころか傲慢である。人間は自然の一部と考えるならば、自身らを囲むそれを良きものにしなければならない。多様な生物と共存する状態を作り出し、人間にも良い影響を与えるという理想の海域、里海は、これからも目指すべき目標だ。日本の大多数は非漁民であるが、私も含め誰しもが、海との関わりは少なからず持っている。その機会を生かし、海へ意識を向ける事を怠らないでいこうと思っている。

竹原和可子：一種類の生物を養殖しようとするとうまくいかず、何種類かの生物を同時に養殖したほうが上手くいくというお話から自然環境の中での循環はすごいものだと感じました。柳哲雄教授は、実験や調査を繰り返して結果を実際に出すことは大変なのに、何を言われても里海を広めるために努力を続け、自分が好きなことをしてきたと言えることがすごいと思いました。私も自分のしたいことを一生懸命頑張って誰にも負けないと思えることを作りたいと思いました。

アムエル：今回の柳哲雄教授の講演を聞いて、里海という概念が誕生するまでの経緯を知り、そしてその意味を理解しました。過度の開発は自然を壊しますが、適度な介入は多様性を保つことに貢献します。上手くそのバランスを取ることが大切だと思います。また、柳哲雄教授が最初に里海という考えを言い出す時、国内では他の大学の人に批判され、国外でも受け入れず、誰も理解しなかったですが、彼は諦めずに、研究し続け、自分の考えを広げようとしていました。その諦めない精神に感動しました。僕もこれから自分の目標から目を離さずに、それを成し遂げるように頑張りたいと思います。

川淵涼介：今日の講話を聞いて、僕は「里海」という言葉が誕生するまでの経緯をよく理解することが出来ました。最初の頃は他の大学の教授や欧米の人達に定義を認めてもらえなくて苦労したことを知って驚きました。そして教授はそれでもめげることなく、なんとか認めてもらおうと日本語で書かれている里海の本を英訳するなどたくさんの努力をして自分の信念を貫き通し、定義を確立させたのが本当にすごいと思いました。また、アマモ場を作成するにあたって、人手をかけてもかけすぎずに極相ではない場所を作ることが大切だ、というお話が一番興味深い話でした。僕は、今まで日生の海ではそんなことは考えずに種をまいていました。これからはその事を自分から率先して地元の漁師さんたちに伝えていき、より良い日生の海を作っていきたいです。

劉美辰：この前ずっと「無為自然」という理念を思い込んだのですが、柳哲雄先生の授業によって、里山と里海のように、人間が手を加えることによって、生物多様性が保全されることもあるとわかりました。しかし、人が環境に干渉しすぎると、自然を壊してしまうこともあります。持続可能な生態システムを作る

ために、環境と人の適切な関わり方を模索し、それを継続していくことが大切です。そして、最近みんなが環境を大切にできるようになって、色々の政策が設定されつつあることによって、環境回復の兆しも見えてきました。これからも海洋人材育成などを行うことによって、海がきっと綺麗になれるだろうと思います。私も微力ながら、環境の保全に力を入れたいと思います。

米澤葵：今日のお話を聞いて、里海について定義からしっかりと学ぶことが出来ました。何か環境を変えたい事があっても、その事だけに囚われてはいけないということも分かりました。し、根本的な所から考えて考えて、様々な視点からその問題を改善する方法を見つけるのが大変だということも分かりました。そして、自分のやりたい事、好きな事で稼げるようになりたいです。

細川美月：今日の講演を聞いて、人間がてを加えて初めて、生物多様性が保全される場がある、それが里山や里海だと分かりました。私は今まで何となく人間が存在しないほうが環境には良いのではないかと、思っていました。しかし、実際には人間が全く手を加えなかったり加えすぎたりするよりも、適度に手を加えるほうが多様性が高まるのだと分かりました。私が特に驚いたのが、海に含まれているリンや窒素の量と漁獲量の関係についてです。赤潮によって養殖していたハマチが大量に死にました。そのため赤潮の原因であるリンや窒素を半分まで減らし、実際に赤潮は減らすことができました。しかし、それと同時に漁獲量も半分になりました。私は、この話を聞き適度に手を加えるということはそう簡単なことではないのだと感じました。この事を忘れずこれからの活動に生かしていきたいです。

松下明香里：柳哲雄教授のお話を聞いて里海という概念はどのようにして生まれたのか、これまでにどのようなことをし、努力されてきたのかを知りました。一種類の生物だけを同じ池で養殖するよりも何種類かの生物を同じ池で養殖した方が水質がよく、ウイルスの濃度も低くなり、成長が良くなるので、環境にも生産にも良いという話は私にとってとても興味深く、自然の循環のしくみはすごいと思いました。私も柳哲雄教授が里海のためにさまざまな努力をし続けてきたように、私も自分の好きなことを見つけて、それについてどうすれば人が助かるのかを考えていきたいと思います。

竹田友希：私が今回お話を聞いて一番印象に残ったことは、人間が手を加えて初めて生物多様性が保全される場があるということです。なぜなら人間は環境を悪化させる原因でしかないと考えていたからです。初めは批判された里海という概念が今世界で必要とされているのは、人々の環境への意識が高まりつつある良い傾向だと思います。その中で 99.9%の私たちが環境に対して何をすべきなのか、そしてその後についても考えながら行動していきたいと思いました。

森末雄大：今回の講義では多くの事を知る事が出来ました。その中でも僕が最も印象に残ったのは、里海という言葉の成り立ちと意味でした。初めて里海の定義を聞いた時「人間が手を加える事が海にとって本当にいい事なのかな？」と少し疑問に感じていました。しかし、今回の講義を聞く中で人の手を加える事で海中の植生を極相に至らないようにし、多様な生息環境を作る事が生物の多様性を生み出しているのだと分かりとても興味深いなと思いました。また、漁民の割合が総人口の 0.1%だと知り驚くと同時に、残りの 99.9%の人々が海に対して深く考え、自分に出来る事を探して行動する事が、今後の海をいい状態に保ち、そしてより良くしていく事に繋がるのだと思えました。

福田紗弓：今回のお話を聞いて、里海とは何かを定義から詳しく知ることができて良かったです。今まで瀬戸内海で赤潮や、工場からの油などによって色々な障害を抱えた魚が多くなり、たくさんの人々が綺麗な海を求めている、裁判が起こったりと私の知らなかった話も聞くことができました。そこで、柳教授が里山の考えを海に当てはめ、里海の考えを示したということは私にはできないことだと思いました。それだけ柳教授は海に対しての思いが強く、人々の海に対する思いも反映できないかと立ち上がることができる凄いなのだと改めて思いました。海外にも Satoumi の英語の論文を出し、世界にも豊かな綺麗な海を作っている柳教授のように、私も海洋学習で海と少しだけ関わってきたので、今回の公演これからの海洋学習に生かしていきたいと思えます。

飯塚朝葵：昨日の講演会を通して、たくさんのことを再確認することができ、さらには色々なことを学ぶことが出来ました。“自然環境に人間が介入するのは本当に良いのか”という疑問は、自分が今までやって来たあまもプロジェクトを省みるための、とても重要な言葉になりました。本当に人間の人工的な要素を自然界に施しても良いのかという疑問は確かにその通りで、人間の都合で自然環境を左右してしまうことに、少し怖さも感じました。ですが、インドネシアでのエビ養殖の話聞いて、人間の技術が海の環境や経済的な問題まで解決してしまったという事例を聞き、改めて、人の手がかかることで、多様性が生まれるという、人間と自然の共存関係の重要さに気付かされました。今後、私たちが行うあまもプロジェクトでも、色々な研究や対照実験をすることで、新たな発見をして、日生の海をさらに循環のある環境にしていければと思いました。

杉本祥太郎：今回の講演を通して、1つのことを突き詰めていけば、それは価値のあるものとなり、運が良ければ食っていけることを知りました。柳哲雄先生は自分では運が良かっただけだと言っていましたが、話を聞いていると、活動が理解されるようになった裏では、半端ではない努力がありました。その努力は自分自身ためではなく他者を思う気持ちからだと思います。これから生きていく上で大切な姿勢だと思います。

魚橋江梨子：私は海洋学習を通じて“里海”という言葉をよく耳にしていたので、今回の講演で、初めて“里海”という言葉自体、最近まで全く使われていなかったことを知り、驚きました。また、柳教授は“里海”を広めるために、どれだけ批判されても自分の意見を主張し続けたという所にとっても感動し、自分もそのような人間になりたいと思えました。そして、人間が手を加えて初めて、環境保全される場があるということを知り、地球の環境を守り続けていくには、人間と自然の両者のバランスを大切にしていかなければいけないと感じました。

本城龍樹：正直に言うと、今日の話やアマモプロジェクトに携わっている 2Mの人達から話を聞くまで瀬戸内地域に住んでいるにも関わらず漁民と呼ばれる人々の力によって瀬戸内の海が綺麗にされていることを全く知らなかった。新聞紙で内容を知るまでは人間が自然に手を加えると生物多様性を壊してしまうのではないのかと思っていたが柳哲雄先生の数々の研究結果も含めある程度の工夫をすることで生態系を保守する以上の結果を出せることにただただ驚きでした。今まで色々な講演を聞いてきましたが面白いと興味を持って聞けたのは初めてでした。先生が最後に言っていた言葉を信じて自分が楽しいと思えるものを選び後悔しないように大学で学び頑張って勉強しようと思えました。大学で自分の好きな事を学ぶために日々精進しようと思えました。

土井翠：今まで聞き書きやアマモの研究をしてきて、「もっとアマモ場を再生させなければならない」とばかり考えていた。しかし、今回の柳哲雄さんの公演を聞いて、アマモ場を極相の状態にさせては逆効果だということに気付かされた。再生させた後のことを考えたことは無かった。やはり、物事をした後のことを想像するのは難しく、同時に大切だと感じた。また、備前市が里海の活動に参加しているのは、備前市民であるにも関わらず、初めて知った。この事についてもっと詳しく調べて、非漁民の私も里海の活動に少しでも貢献できるようにしたいと思った。この先、更に里海概念が浸透し、その研究が発展して多くの人々が里海の活動に参加することによって、豊かな海が戻ってくるといいなと思った。

福田楓：私は今日の講演で改めて繋がりというものの重要性を感じた。特に沖縄の恩納村漁協の取り組みが印象的で、サンゴの保全のために様々な団体が連携を取り合っていた。また、アメリカと日本の自然との関わり方で「保存」と「保全」という異なる考え方があって面白いなと思った。これらのお話を聞いて、「人と人」、「人と自然」など沢山の繋がり方で保全をしていかなければ里海や里山を作ることができないのだと思った。今の生活ではアマモの海洋学習を通して「人と自然」について考える機会があるが、もっと自分の生きている環境を知りたくなった。

山野晃平：漁民は沿岸地域の監視役、保全をするなど重要な責任や役割があることを知りました。その人たちがいることによって綺麗で豊かな海が形成されていくんだなと思いました。感謝しています。最後の方に先生が自分が後悔しないようにやりたいことや好きなことをした方がいい、そうすればお金も入ってくると言われた時に自分はまだ将来の夢とかやりたいことがなにもないなと思いました。だから将来後悔しないようにこれから勉強をしながら興味を持てるものを見つけていけたらいいなと思いました。

山本祐馬：自分は生物選択でもないしアマモで活動しているわけでもないで聞く前は専門用語とか全然聞いても意味がわからないかなと思ってました。講話が始まると自分でも少しはわかるような話の内容だったので聞きやすかった。最初のお化けハゼや背骨の曲がったボラは衝撃的だった。瀬戸内海の赤潮による被害額が71億だったと聞いた時は想像もできないくらいすごい状況だったんだなと思った。工業廃水が環境に及ぼす影響は恐ろしいものだなと思った。多様性と生産性を両立することで環境も汚すことなく計画はうまくいき、あわよくばお金も手に入るという良い循環が生まれることがわかった。最後の質問の中で、やりたいことをやればいい、後から後悔するのが一番辛いという話はまさにそうだなと思った。自分も後悔しないような人生を送りたいと思いました。

石井杏奈：里海という言葉の意味さえ知らなかった私にとって、今回の講演会は新鮮でたくさんのが学べました。特に、インドネシアでの養殖エビについての話は印象的で、水中でも食物連鎖の形を作ることが大切だとわかりました。また、アマモ場に関して、極相を作らせないのが重要だということが意外で、人間が手を加えることによって、生産性と生物多様性どちらも向上できるのだと理解できました。私は今のところ、農学部を志望しているので、今日のお話を今後活かしていきながら、自分から興味を持って勉強できるような分野を見つけたいと思いました。

服部蒔季：人間は工業などで自然に悪影響を及ぼしてしまう可能性がある一方、人手が加わることで多様な生息環境を作り、海の生物多様性が保全されるということから人と海の繋がり強いんだと感じた。ま

た、アマモの海洋学習の取り組みは日生の海を間近に触れることができ、貴重な体験なんだと改めて思った。これが非漁民も関わって協働していくってことだろうと実感した。日生の漁師さんに聞き書きをした時、漁師が森に木を植える取り組みをしている地域があると聞いたので、里海と里山の繋がり意識も広がってきているんだと思った。そして第一次産業の重要性を知り、自分はどのようにして関わっていか考えようと思う。

ゴゲツキョウ：私にとって、里海は新しい言葉であります、今日の講演会で柳哲雄教授の話をお聴きまして、たくさんものを勉強しました。結構インターネットや周りの人から「人間が存在しないことが地球環境保護に最も有効」の話聞いてますが、今日里海の話聞いて、「人間が手をかえて始めて生物多様性を保全する」と言う視点がとても興味深いと思いました。最後やりたいことやりたいときにやる、後悔することは楽しくないと言う話を聞いて、将来後悔しないように頑張りたいと思います。

春名高歩：海の環境を保全していくことの大切さを知りました。人の手を加える事によって、きれいで、豊かで、にぎわいのある持続可能な沿岸地域をつかっていく事への興味もわきました。日本から生まれた「里海」という概念が、現在は他国で評価されている事を知り、誇らしく思いました。私はアマモの研究をしています。今までの私は海の環境などを気にせずに、アマモを植えることにしか目を向けてませんでした。これからは、アマモ場をどうやって管理していくのか。どうやって極相にさせないのか。また、どうやって色々な人々と連携をとっていくのか。高校生の私では微力かも知れませんが、日本人の1人として、考えていこうと思います。

金光帆乃花：今回の講演で、人間が手を加えるからこそ生物多様性が保全される場があるということを知った。また、事前に配られた新聞を読んでインドネシアの養殖エビについて興味湧いていたので、さらに詳しいお話を聞いて改めて面白いと感じた。講演後の質疑応答では、自分が何を一番したいか、何に興味があるのかを元に今後の選択をすれば良いと聞き、選択肢を増やすためにも多くの知識を身につけたいと思った。また、自分の強みが必要だと聞いてその通りだと納得し、自分の強みになる何かを発見したいと思った。

大谷妃向子：自然環境にも自然の生き物にもほとんど知識も興味も無いので、お話を聞く前は理解することができず不安でした。しかし、柳教授のお話はとても丁寧で、わかりやすく、気づいたらとても集中して聞いている自分がいました。一番印象に残ったのは、海老の養殖の話です。海老だけ育てるよりも、他の生物と一緒に育てた方が水をきれいに保つことができ、更に育ちが早いと言うことを聞いて驚きました。また同時に、柳教授は日本だけでなく、海外の人にまで役に立つことのできる仕事をしていて、教授ってすごいなと思いました。私も誰かの役に立つことができる人になれるように頑張ろうと思います。

林拓翔：今日の話聞いて、国民の0.2%だけが漁民ということに驚き、そして私たち普段海に関わらない人たちが、海の保全にもっと関わらなければならないと思いました。保存と保全に今までそんなに違いがあると知らなかったのが今回知ることができて少し賢くなった気がします。また、戦後海が汚くなったというのは知っていましたが、どれほど変わったのか、どのくらい影響が出ているのかは知らなかったため、赤潮についてや、漁獲量の増減のデータを見て、こんなにも影響がでていることに驚きました。漁民にとって死活問題だ、と言うのもすごく理解できましたし、具体的な数値として現れるとすごく納得できまし

た。最後に、教授は好きなことをして飯を食っていけるとおっしゃいましたが、それはなかなか難しいことのように自分は思え、少し羨ましく思いました。なので、将来好きなことをしてお金を稼げるように今のうちにいろんな知識や技術を磨き、自分のやりたい仕事につけるよう頑張りたいと思います。

塚本裕太：今日はお忙しい中、学芸館高校で講演会を開いていただきありがとうございました。僕は笠岡に住んでいて小さい頃から海は身近な存在で、よく船に乗って魚を釣りに行ったりしていました。なので今回の講演会を楽しみにしていました。そして、期待通り今日の時間はとても有意義で里海のご概念だけでなく、これからの人生の教訓にもなりました。特に心に残っているのが、柳さんが学生時代の時に自分の研究で漁師さんの飯を食わせる助けになりたいとおっしゃっていたことです。そのために里山と同様に里海もできるのではないかと考え試行錯誤し、もちろんそれを批判する人がいる中でも決して考えを曲げずに貫き通されたことに心を打たれました。まだ誰もやっていないことに挑戦するという事は大きな反感や大きな課題が出てくるかもしれません。しかしその中でも漁師さんのため、という気持ちがいつも背中を押していたんだと思います。そしてそれが見事に成功し、今では瀬戸内海の漁師さんだけでなく、日本国民のために国を背負って研究をしていらっしゃる、さらに僕が驚いたことはフィリピンのエビの養殖場でさえも柳さんの実験が役立ち、日本だけにとどまらぬ活躍をしていることです。学生時代の何気ない夢が、こんなにも大きな形になってしまうことに驚くと同時に、それほど柳さんの信念が強かったことを表していると思います。僕は小学校からの夢を諦めこの学校に来ました。なので、今自分に全く夢がなく将来のビジョンなどかけらもありません。しかし、柳さんほどの成果は成し遂げられなくとも、少しでも自分の母国である日本に貢献できるように高校、大学と勉学に励み、たくさん本を読んで教養をつけて自分の夢を早く見つけたいと思います。そして、その実現のための努力を忘れず、柳さんのような強い信念を持ち、必ず実現させようと思います。加えて、今ある自然を当たり前と思わず柳さんの教えてくれた里海のことを念頭において少しでも長く今ある自然を持続、いや、より多様性のあるものにしていけるように自分ができることを考えようと思いました。柳さんの残り 1 年の研究の成果によって笠岡のカブトガニも救って欲しいです！

真野彰久：リンや窒素によって起こるハゼやボラへの健康被害から、工業排水が自然に与える影響について、山と同様里海も人の手を加えることで生物の多様性と生産性を向上させることができることを学べました。無干渉で放置しておくことが自然保護や生産性に最もいい影響を与えていると思っていたので、この考え方は新鮮に感じました。また宗教の違いで、自然との代わり方や自然の扱いに違いが生まれることがとても印象に残りました。今日の講演を聞いたことを、活かしていろいろな知識を得て自分の好きな分野を見つけて自然と関わって生きていこうと思いました。

阿部仁美：私は以前も柳先生の講演を聴いたことがあったんですが、今回も聴いててすごく糧になるものだったと感じています。瀬戸内海を中心に日本の様々な場所で行われている里海プロジェクトについて聴きながら、私は自然にヒトの手が加わることのメリットを改めて実感させられました。乱獲や干拓などの印象が強いため、ヒトが自然に干渉することは悪いことだという認識は深いですが、接し方によって毒にも薬にもなるんだと感じました。その後のインドネシアで 4 種の生き物を同じ池に入れて養殖するという話も、東南アジアのエビや魚を輸入して食べている私たちに大いに関係があることだと思いました。私はカンボジアに行ったことがあるのですが、そこで訪れた幼稚園にあったため池は黒くにごって魚もほとんど居なくて、どうすれば改善されるのか昨年考え込んでいたので、一つの解決策を示された気分です。講

演の主題とはずれませんが、最後の好きなことをすればいいという言葉もすごく身にしみました。今、私は改めて進路について悩んでいるのですが、好きなことを究められる職業も視野に入れようかなと思えました。

相見真弥：里海という概念が生まれるまでの経緯に驚きました。さらに、海外との考え方の違いにもっと驚きました。その背景に宗教があったり、工場との関わりも知ることが出来て良かったです。今回の里海のお話を聞いて、今後の海に対する活動と、山・地・海のつながりを気にかけていきたいと思いました。

藤本朱夏：そもそもアマモプロジェクトに参加していないので、最初は『里海』とは一体何なのかもよく分からなかったし、そんなに興味もなかった。しかし、草であるアマモの量によって海のきれいさ、魚の健康などが変わるとき、分かった。国の政策にまでなったというその影響力にも驚いた。また、最後に柳さんがおっしゃった『自分のしたいことを一生懸命する』という言葉のとおり、自分の信じる道をすすめるようになりたいと思う。

王杭天：今回の講演を聞いて、ヨーロッパの伝統的な概念と違って、人手が加わることにより生物生産性と生物多様性が高くなった沿岸海域の概念が分かった。今、海ごみの増加、海の生物多様性の減少などの海的环境に応じて地域ごとの海と人との適切な関わり方を模索し、それを継続していくことが大切だと思います。

藤原拓巳：今回の講義で貴重なお話が聴けてとても良かったです、自分が興味深かったのがインドネシアでのエビの養殖に中国での四大家魚(ソウギョ、アオウオ、ハクレン、コクレン)の養殖方法を応用したという事で日本でもゲンゴロウブナとタモロコの養殖において同様のことがされているということは本で読んだことが有りましたが、自分たちが普通に食べているエビがこの方法で上手く飼育できるという発想には驚きました。思えば、今自分がウナギ、コイ、金魚を飼育している水槽もかなりの期間水を継ぎ足すだけで大規模な水換えはやって居ないのでが適度な量の水草とタニシ、シジミ等のベントスを入れている事が四大家魚の養殖に近い環境を作っているのかもしれないと思いました。それと木村先生のお話でも今回のお話でも持続性と言う言葉が使われていてやはり自然を守って行くには持続できることが大事と思いい層 SGH への意気込みも増しました。次にマツタケが適度に人が管理している里山の松林に多いということは聴いたことがあり、やはりそれは里海でアマモと魚の関係にも当てはまると分かり興味深かったです。最後に欧米と日本での自然との接し方の違いについてはとても納得できました、神が作った物の欧米に対して、日本は仏教の他にも自然には八百万の神々が宿ると言われていて、アイヌでも同様に自然に霊が宿るとされていて里山、里海の概念も日本特有だと思いいこの国に生まれたことをとても嬉しく感じました。

9) 里海交流シンポジウム「浜をつなぐ子どもたち」

1月27日(土)

海洋教育パイオニアスクールとしての取り組みを日生中学校、小串小学校、岡山県立笠岡工業高校、本校医進コースが発表した。また、海洋政策研究所の古川恵太氏の基調講演やパネルディスカッションも開かれた。



生徒感想

竹原和可子：今までは日生の海についてしか知らなかったけど、今回のシンポジウムで岡山の海について知ることができました。小学生から高校生まで色々な視点からの発表を聞いて、共通するのは海が好きだという気持ちとその海を守りたいという気持ちだと思いました。近くに海があって、アマモプロジェクトの日本、世界最先端の繋がりがあるからこそ出来ることだと思うので、これからも日生の海を少しでも良くするために活動を続けていきたいと思いました。

松下明香里：私は今日のシンポジウムで今まで思っていた以上に海は私たちにとっても環境にとっても大切なものだということがよくわかりました。再生活動は人間の生きるための知恵を教えているのではという考えや子供の感性は体験によって育つという話からもこれらの活動の重要性を感じ、これからも海を良くするために活動を続けていきたいと思いました。

劉美辰：今回のシンポジウムを通して、海についての知識を深めることができました。藤田さんの発言によって、海の近くに住んでいる子供達は、以前は海を眺めているだけをしていましたが、海洋学習を通じて海と結びつけることができたとわかりました。私的にも、教科書ではなかなか身につけられないことを、実際の体験によって、いろんな実感ができました。持続可能な社会というのを実現するため、先輩から後輩へ、経験を伝承していくことは大切だと思います。

アムエル：今日の講演では、海とアマモ再生活動の理解を深めた。小学生から高校生まで、みんな力を一つにし、海をよりよくするために頑張っていて、そして協力している姿を見て、すごく感動した。自然環境を改善することは、地域の人々の繋がりを深めることにも役立つと思います。これからはこの気持ちを忘れずに、自分のできることをやり続け、海を良くする為に頑張りたいと思う。

砂子夕馬：里海交流シンポジウムは、地域と世代をつなぐものと理解した。これは個人的に、前者は人と自然を結び付け、後者は人と人とを結び付けるものだとして解釈する。教育に実際の体験を加えた素晴らしい活動であると共に、多角的な視野と感性が自然と関わって身に付くであろうから、私も主体的に学び、経験をしていこうと思う。それらはただ一点を見て掘り下げたものでない。自身が今何処を詳しく調べているのか、何を求められているのかを立体的に俯瞰する対局観をも見られる。私自身、自然が好きだ。だから人間の行動で環境が破壊されている状況を、アマモの再生活動で元に戻したい。その経験を人生に生かしたい。里海づくりに、微力ながらも尽力していきたいと思っている。

岡田祥吾：今日の活動報告会で、私達や日生中以外にもアマモについての活動をしている学校があつてとても驚いた。特に全校生徒がごく少数の小学校が活動していると知り、感心した。これからの社会では、環境に関する危機に面することが必ずある。だから、年少の頃から環境に接し、これからの環境との接し方を考えていくということをするということは、とても大切なことだし、進んでしていく必要があると感じた。日生中が海洋研究をしているときに感じていた「ただ海を見ているだけで、海と関わっていなかった」というのは、「身近過ぎて見えない」ということで、危険なことだと感じた。環境問題は、身近でありながらも、人々が危機を感じず放っておいたからこそここまで進んだのだ。これから、環境問題は進行していくだろう。だから、優れた感性を持ち、身近なことにも目を向けていくことが大切と感じた。

細川美月：パネルディスカッションのとき、日生中学校の先生が「生徒は目の前に海があるのに海の話全然しない。自分達が普段見ている海が環境破壊されているのを知らない。」と言っているのを聞きました。そのとき私は、私もその生徒と同じなのかもしれないと感じました。なぜなら、私の家の裏には山があるのですが、その山について私は全然知らないし、無関心だったからです。今回この話を聞いたことで、私も地元について調べ、知り、関心を持たなければならないのだと感じました。また、「海が養分だけでなく熱や気体なども運び海深くにためている」、海は人間のやったことを緩やかに緩和してくれている」ということを聞いた。私はそんなことは全然知らなかったもので、とても驚き海は私達が思っている以上にすごいものなのだと感じました。今回の話で、もっと身近なものにも目を向け、実際に体験していくことが必要だと感じました。

川淵涼介：今回のシンポジウムでは、小学生から高校生までの学生や、大学の教授などアマモに関わる人達がたくさん集まっていたので、いろんな視点から見たアマモの再生活動についての考えを知ることができ、改めてアマモの役割や大切さを理解することが出来ました。藤田先生が言われていましたが、僕も以前までは、地元の海である日生の海を毎日眺めるだけで綺麗にしようという思いは一切ありませんでした。しかし、アマモの活動をしていく中で、やはり少しずつ海のことを気にかけるようになっていきました。これからは、海の問題をまだ理解していない以前の僕のような人達に、僕と同じ考えを持ってもらえるようにこれからの活動を通して日生の海のことを伝えていきたいです。

竹田友希：今回私は色々な方のお話を聞いて、自分の視野の狭さに気づきました。今までアマモ再生活動を行って来て、日生の海がより良くなることを願っていたが、そもそも海全体のことをあまり考えられていなかったと感じました。他の学校のプレゼンテーションを聞いている時に、自分は日生の海のことしか

考えておらず、そしてその先自分がどのように次の世代に伝えて行くかなど、その後の活動に対しての考えも曖昧だと思いました。自分たちがこれから何をすべきなのかをもっと深く考えるとともに、この活動によって社会にどのような影響を与えるのかなど、より発展した考えも必要であると思いました。また、個人的に興味があったのは、小串小学校の里海と里山のつながりについての活動です。私の近所には山がないため、里海と里山のつながりと聞いてもあまりピンとこないのですが、小学生のうちからこのように自然と触れ合い、自分の周りの環境について考えることが出来るのは、その地域の特性を生かした素晴らしい活動だと思い、純粋に羨ましいとも感じました。このシンポジウムを機に、小串小学校とも里海、里山の活動での繋がりが出来たらいいなと思います。

福田紗弓：今回のシンポジウムに参加して、基調講演である古川さんのお話で海は地球の熱を吸収し、深海まで運んでいくサイクルが1000年であるということに驚きました。私は、海は毎日少しずつではあるが熱を吸収しているのかと思っていたため、すごく勉強になりました。食物連鎖が食物網と言われてきていることも、中学生の頃に理科で食物連鎖の図を書き連鎖が網目状になっているのを思いだし、理解を深めることができました。ディスカッションで「医者になる人は、人の痛みをわかる人でなければならない」という言葉を聞き、私も一応医進コースに所属させていただいているので、私は将来何に就くかはまだ決まっていますが、高校3年間でそのような人になれるように努力していきたいと思います。

杉本祥太郎：シンポジウムに参加して、今までなんとなくしていた僕たちの活動は、小・中・高が連携して行う全国でも珍しい活動だと知りました。また様々な方面の専門家方の説明でこの活動にどれほどの価値があり、将来的に有望なものであるかわかりました。いつもは黒板の前で授業をしている柳先生が、沢山の先生方とディスカッションしている姿は普段見れない一面を見れたようで少しワクワクしました。

森末雄大：今回のシンポジウムでは、自分の中での海に対する考え方や接し方が変わる、とてもいい機会でした。古川先生のお話では世界の海における危険として、ゴミの堆積している状況や温暖化・貧酸素化などと、日生の海にしか重点をおいていなかった自分にとって、世界的な視野で海の現状を知り得ることができました。また、こういった海の問題に対して環境面からだけの対策を考えるのではなく、blue economy といったように経済的な面と合わせて考える事が大切だと知り、とても面白かったです。そして、各学校活動報告の場においては、同じ意見もあれば、異なった意見もあり、違う考え方も知れてとても参考になりました。

米澤葵：シンポジウムに参加、発表して、環境を守り持続可能な社会を作る大切さ、そして世界中で協力していく必要性を学びました。プレゼンをするのは大変でしたが、意見をまとめて人にしっかりと伝えることは今後にも役立つので良い経験になりました。ありがとうございました。

魚橋絵梨子：今回のシンポジウムでは、アマモの再生活動に対して、小学生から大人まで幅広い年代の視点から考えを聞くことができ、とても良い経験となりました。私たちも、日生でアマモの再生活動に参加させていただいたけれど、自然を再生するには、発展させるだけでなく、環境をまず守ることが大事。そして、社会にも目を向けながら、活動を行っていくことが大切なんだと分かりました。

福田楓：今回の講演で、私は沢山の分野に目を向けることがとても大切だと感じた。古川先生のお話にあった持続可能な開発目標の中に、「安全な水とトイレを世界中に」という項目があった。水は直接、人の体に入るものだから理解できたが、なぜトイレなのだろうと疑問に思った。古川先生に聞くと、「家では台所、風呂、トイレの3カ所で主に水を使う。その水が下水道、浄水場を経て海に流される。今でもトイレが整備されていない所があるため、汚い水を海に流してしまっている。だからこのような目標になっている。」とのことだった。私はこのお話を聞いて、単に水といっても使う場所は様々だが、流れ出るところは最終的に海であることに気付かされた。また、マイクロプラスチックの話は聞き書きの際に古川先生に教えていただいたが、それが5マイクロ以下になると、魚の体液に入ってしまうということを初めて聞いて驚いた。このままだとヒトや動物に新しい健康被害が出てしまう。今、各国がゴミのポイ捨てを禁止する政策をとっている。しかし、現在海の中にあるプラスチックなどのゴミはどのように取り除くのだろうかとの疑問に思った。これは生物学だけでは解決できないため、物理、数学の知識が不可欠だと思う。これからは、さらに沢山の事に目を向け、積極的に学び、そして、広い視野と柔軟な思考力を身に付けたい。

春名高歩：ブルーエコノミーなど自分の知らない言葉を知る事が出来て、更に興味が湧いてきた。人間の作ったプラスチックが、マイクロプラスチックとなり海洋生物に悪影響を及ぼしていたり、海中の酸素が少なくなっている事を知った。アマモだけじゃなくて、海全体について考えていくべきだと思った。パネルディスカッションでは、海洋学習の内容を発表する機会はあるのかと聞かれた。医進コースとしての発表はないので、そういった場を作っていきたい。学生の時から、自分達が出来る事を考え、約束していきたい。

土井翠：今回の講演で、海は今、私が思っていた以上に色々な問題を抱えていることがわかった。pHが0.5下がり酸性化し、酸素のない水ができてきているというのは初めて聞いたことで、とても驚いた。海から多くの恵みを知らず知らずのうちに受け取っている私たちは、もっと積極的に海に対して恩返しをしていかなければならないと思った。発表では、事前に確認していたスライドと一部変更点があり驚いたが、それ以外に大きなミスがなくてよかった。

作野竜人：今回は色々な視点での発表を知ることが出来ていい勉強になった。ただ、古川先生の発表は規模が大きすぎてあまり気持ちを入れても考えることが出来なかった。いつの間にか話がすごく大きくなっている気がして、おいてけぼり感は少しある。自分の発言は今回は無かったが、次の全国発表では一言二言くらい発言出来たらいいなと思った。

藤原拓巳：幼い頃からアマモ場で遊び海の生物と慣れ親しんでいた自分にとって今回の各校の発表は既知の事も未知の事も知れとても面白かったです。以前に医進の皆がアマモの研究をしているとは聞いていましたがここまでの規模のものとは知らず驚きました、そして以前木村さんがおっしゃっていた様に農林水産の提携は必要だと思いました、そしてそれを裏付けるように岡山コープの方の発言や各校の発表の中にも海と山、畑への繋がりが有り農業部員としてせつかく学芸には農業部が(一応)有るので提携して活動したら良いのではと思いました。最後に幼少期よりアマモ場とそこに住む生き物に親しんできた者として残りの学校生活の中で何か自分も協力できたらと思いました。

10) カキの洗浄・出荷作業および BBQ 体験

2月14日(水)

日生中学校との協同で、水揚げされたカキを金属ヘラで仕分け・洗浄したり、出荷用のケースに詰めたりする作業を体験した。また、自分たちが洗浄したカキを BBQ にして味わった。アマモ再生活動とのリンクや、物質循環の視点での里海管理のあり方を体感することができた。



生徒感想および1年間の海洋教育を振り返って

飯塚朝葵：私はもともと街中で育ったこともあり、海へは夏休みに行けたら行くぐらいのもので、全くと言っていいほど関わりがありませんでした。なので、最初の頃は右も左もわからずにただただアマモについて学んでいただけでしたが、それを通して、アマモ場の必要性や重要性を理解し、また、その上で今の自分に出来ることを考えることが出来ました。クラスのみinnで取り組めたことはとてもいい経験になったと思います。アマモ養殖は今後の日本の漁業において必要不可欠なパーツだと思います。学んでいくうちに、アマモの恵は至るところに良い循環をもたらし、海を持続可能な生態系に変化させているということを知ることが出来ました。そして、そのアマモを養殖するのは私たち人間です。自然環境に、敢えて人間が介入することでもたらされる好循環を私たち高校生が身近に学ぶことは、これからの未来に繋がる取り組みだと思います。私たちに今求められているのは、こういった活動を通して、未来にあるべき姿を考え、そのために今なにをすべきかを実行する事なのだと気づきました。1年間に渡る海洋学習で身につけたことは数え切れません。

劉美辰：アマモの種まきから牡蠣の片付けまで、この一年間色々やってきました。最初の時は漁師のことが全然分からなかったが、聞き書きで漁師の妻の喜江子さんに話を聞いて、漁師としての辛さを感じました。そしていろんな実践によって海との関わりをできました。そして喜江子さんのおかげで、シンポジウムで発表することもできて、いい経験になりました。一番感動したのは、海は人為的な汚染を受け止めて、

そして人が海の環境を維持するために一生懸命働いているということです。中国では絶対ない経験を積めて本当によかったと思います。これからマレンチャレンジに向けて頑張りたいと思います。

竹内サラ：今日の牡蠣の掃除や今までのアマモ活動を通して本当にたくさんのことを学ぶことができました。最初は日生の海がアマモ活動をしていることや、なぜしているかなど全く知りませんでした。しかし、漁師の方とともに活動することで里海という概念を学ぶことができました。海はほったらかしにしてもいけないということを学びました。程よく人間が手を入れてあげることでいい海になって行くのだとわかりました。本当に貴重な体験をさせていただくことができたのでこれからの自分の人生に活かしていきたいです。

竹原和可子：今日は牡蠣の箱詰めをしました。今までは入っているのを買うだけだったので牡蠣を洗って選別して詰めていくという作業は大変だと思いました。また、今日で1年間の海洋学習が終わりました。1年間、初めての体験ばかりでとても楽しく、良い経験になりました。アマモは海に欠かせないものであり、日生の海は漁師の方など多くの人の努力によって守られていることがわかりました。この海洋学習で学んだことをこれから活かしていきたいです。

松下明香里：今日牡蠣の水揚げで、牡蠣は大変な作業を経て私たちのもとに届いているのだということがわかりました。また、殻を取った牡蠣に始めて値段がつくので殻のついたままの牡蠣は値段がつけられないということにとっても驚きました。一年間海洋学習をしてきて、今まで知らなかったようなことを勉強したり、初めての体験をさせていただいたことはとても楽しく良いものになったと思います。これからもこの体験をいかしていきたいです。

魚橋江梨子：今日の牡蠣磨きの作業は、自分の想像以上に体力を使う、とても大変なものでした。普段、当たり前のようにスーパーに並んでいる食べ物は、牡蠣に限らず、影で多くの人が、今日経験したようにたくさんの労力をかけて下さっているからあるのだと改めて感じ、きちんと感謝して食べなければいけないと思いました。また、私にとって、海や漁師さんという存在は、身近に感じるものではありませんでした。しかし、この1年間の海洋学習を通して、海の大切さを1から学び、実感することができました。この貴重な経験を、これからも色々な機会に活かしていこうと思います。

杉本祥太郎：今日の牡蠣磨きは初め見たとき、あまりの多さに唖然としました。磨いても磨いてもいっこうに終わらず、大量出荷の苦労を痛感しました。最後の方は手が勝手に動いていて、それをじーっと見ているような不思議な感覚でした。それほど夢中に作業していたのだと思います。皆で牡蠣を食べた後、バスの中で先生が「とりあえずこれで日生での活動は終わりです。」と言ったとき、一年間の活動の記憶が走馬灯のように駆けめぐりました。初め右も左も分からない中、いわれるがままに作業をし、自分の意見なんて持っていませんでした。そんな自分が嫌で、それからは積極的に活動に参加するようになりました。その後は自分の意見を持っているだけでなく、相手に伝えるように心がけました。聞き書きの際にはそれを実行に移す事ができ、少しずつ成長できているのかなと感じました。そんな変化は日々の生活にも出てきました。今までは受け身だった授業にも疑問がわくようになり、学んでいる実感を強く感じました。一年間の海洋学習で僕はひとまわりもふたまわりも成長できました。この活動で学んだことをこれからも忘れずに日々邁進していきたいです！

川淵涼介：牡蠣の選別を終えて、僕たちがいつも食べている牡蠣は私たちに届く前に漁師さんたちが手間暇かけて牡蠣を選別してくれていることに改めてありがたいなと思いました。僕達が磨いた牡蠣をスーパーVの人達や先生方に配ると「ありがとう。」と言ってくれた時に、一生懸命磨いてよかったとやりがいを感じました。1年間の海洋学習を通して、全て1度中学校でやったことがあったけど、より日生の海やアマモのことに知識を深めることが出来たのでとてもよかったと思います。また、2回目をやるからこそ分かるアマモ場再生に携わってきた人達の苦労や努力、これから僕たちがやるべきことを知ることもでき、本当にいい体験をさせてもらえたなと思いました。これからはこの深めた知識を活かしてより良い海作りをしていきたいです。

アムエル：今日の牡蠣磨き作業では、普段スーパーで買っていた牡蠣は苦労を重ねて作られたと分かった。作業は大変だったが、牡蠣バーベキューが美味しかった。この一年間の海洋学習を振り返って見ると、最初は右も左も分からなかったが、先生たちのアドバイスを受け、自分も努力しながら、色々なことを経験した。アマモ再生活動も聞き書きも、僕にとって貴重な経験だ。海洋学習で学んだ知識や考え方を生かして、マレンチャレンジに挑んでいきたいと思う。

岡田翔伍：今日まずやったカキ磨きは壮絶なものだった。いくら磨けど磨けど磨かれていないカキの山が目の前にそびえたち、そしてカキの置かれた台の表面すら見えない。磨くときには椅子もなく、常に立ったままだった。まさに地獄、まさに沼である。それが2時間ほど続いた。その頃にはもう私の手も足も膀胱も限界だった。そんな時に職員らしきおじさんから「大きいもの以外はすべて捨てていい。」とのお達しがあった。そのときは何という思いがけぬ幸運と思い、半狂乱になりながらカキの選別をした。後から思えば、せっかく育ててきたのに「大きくないから」とただ捨ててしまうのはなんともったいないことだろうと思った。この時期のカキはただ捨てられているようだった。そういった海洋廃棄物に利用法を見いだすことを海洋研究でやってみるのも面白そうだと思った。一年間の海洋学習を通して、私は海や生き物のことについて、より関心を持てるようになった。もしこの学校に入らず、海洋学習もしていなければ、アマモの存在や里海という言葉、現在の海洋に関する危機について関心を持つこともなく、知ることもなかった。これからもこの関心を持ち続け、研究に取り組んでいきたいと思った。

竹田友希：今回、水揚げされた牡蠣を磨くことは予想以上に大変で驚きました。私は普段ほとんど海との関わりもなく、殻付きの牡蠣さえあまり見たことがありませんでした。なので、この海洋学習がなければ、自分が口にしている食べ物がこのような大変な作業を経て流通しているということを考えることはなかったと思います。そして、食べられることが当たり前になっていましたが、その当たり前には多くの方が携わっているということを実感しました。この一年間の海洋学習はとても貴重な体験になりました。アマモ再生に携わったり、専門の先生方にお話を聞いたりして、漠然としか考えたことがなかった海に対して、様々な視点があることに気づきました。以前まで、海は風景の一部という感覚でしかなく、その中でどのような事が起こっているのかを考えたこともありませんでした。この一年間で、知らなかったことをたくさん学び経験する事ができ、とても楽しかったです。物事は表面上だけでなく本質を知ろうとすることが大事だと強く感じました。今まで学んだことを生かしていきたいと思います。

細川美月：牡蠣磨きはとても大変でした。やってもやっても終わらず、漁師さんの苦労を知りました。ま

た、牡蠣の選別では小さな牡蠣が捨てられていて少しもったいなく感じました。1年間アマモの種まきや牡蠣磨きなどたくさんのご経験を体験しました。どの体験も初めてやるものでとても面白かったです。また、日生の海や漁師さん、アマモについてもたくさん知ることができました。特に印象に残っているのは聞き書きです。普段関わる事のない漁師さんの話を聞くことができ、本当に良かったと思います。この1年間の体験を忘れず、この先色々なことにかかしていければいいなと思います。

福田紗弓：1年間の海洋学習を通し、自分たちでアマモをとって種を植え、海に関する数々の講演を聴いたり、アマモを使って牡蠣を育てたりする事で、沢山の人が海に関わっており、その人たちに支えられながら私たちは生活できているのだと改めて実感できた。私自身、日常生活で海に行くなどして海と関わる事がないので、海に関して学習し、自ら体験する事によって、人から教わるだけでは分からなかったであろう漁業関係者の皆さんへの感謝の気持ちや、アマモなど海洋生物の大切さなど沢山の事を深く理解することができた。これからも今までの経験を生かし、考えながら生活していきたいと思う。

砂子夕馬：作業場へと足を踏み入れた時には、確かな海のおいしさや覚えが感じられた。既に多くの人らが牡蠣と向き合っており、自分にとってその集中する様子は、少し排他的な雰囲気を受けた。いざ自分も同じように取り掛かろうとするが、単純な作業に思えてその実、気にかける事が多い。牡蠣の鉤の如き凹凸は、手袋ごしからも把握でき、慣れない作業から怪我を恐れた。しかし、ある程度経つと様になる。商品になった牡蠣の殻の形を思い出すと「こう削るとあんなのか」という、妙な共感を得ることもあった。固着した物質をおぞましいとは思いつつも、削ぎ落とす磯と共に牡蠣を磨く。同じ動きを繰り返し痛み、硬直した指を気遣う。その合間にもちょっとしたコツを教えて貰いながら、考えた。普段、皆様はこのような仕事に、どのような思いをもってつとめているのかを。結局には、満足のいく結論は得られなかった。残りの牡蠣が大量であるからか迅速な動きへと変わり、一点に集中する落ち着いた雰囲気とは一変し、自身もそれに流されていた。少しだけだが、私が掴みかけていたそれは、質の良い牡蠣が店先に並ぶ風景だった。続く牡蠣バーベキューでは、直前に体験した牡蠣磨きのおかげか、印象が全くの逆になった。私はもともと牡蠣が食べられない。幼少期、受け入れられなかった、ただ一口の味「苦い」という事だけを記憶していた。しかし、今日の経験の後には何故か「食べられるだろう。食べてみたい」という自信と欲求が湧いてきた。それは偏に、共に頑張ったクラスメイトが牡蠣を頬張る姿を見たからだ。追従するよう、自らも牡蠣を食べてみた。多少の苦みが幾年前の記憶を磨き上げる。この感覚が何より、今回は一年を通していっと自身成長を感じられた日だと、確信させた。沢山の人が同じように牡蠣を食べている。その事実が、共存、共和の想いを現していた。地域、自然に結び付く海洋学習が、私を変えた。これからの人生にも幸せをもたらすだろうこの体験に、協力してくれた方々に、感謝を申し上げたい。自然と人との絆を理解し、また関わりたい。思念、希望を聞き書き、講演が繋ぐ。アマモの種は鮮色と共にそれらを見紛う事のない未来へと成長させる。大勢で分かち合う食は、その年月を身体に刻み込む。これは、私が経験を通して結い上げた一筋の糸だ。完璧な結論ではないにしろ、経験を言葉にしたために、頑強さは、重さは、少しなりともある。この糸を終身まで刻みたい。糸端は後世に繋ぎたい。人として、人と自然を所縁あるものにしていく。

米澤葵：2月14日の牡蠣磨き、選別をして、漁師の方々はこの牡蠣の何倍もの量をしているんだと思うと、働く、お金を稼ぐと言うのは大変なことだと思いました。2017年から1年間海洋学習をしてきて、海がより身近なものになりました。私は海が近所に無く、遠い存在で、海は観光的な面でしか見たことがありま

せんでした。しかし、海洋学習で海の仕組みを漁師さんから学ぶ活動や海の為にしている活動を通して、里海という概念を初めて知りましたし、海に関わり、守る大変さも学びました。関わり過ぎる。つまり人が使い過ぎても良く無いし、使わなさすぎるのも海にとっては悪いことだと知りました。恐らく、海洋学習をする前の私なら、環境が悪いなら「人が干渉しない様にすればいいじゃないか。」と思っていたと思います。しかし、柳先生のお話や漁師さんへの聞き書き、実際にアマモプロジェクトに参加して感じたことから今の自分は「人が環境を崩さない程度に管理してあげる必要がある。」と、この様に考えることが出来ます。この活動を通して、多面的に物事を見る大切さ、様々な人から話を聞く大切さ、実際に肌で感じる大切さを学びました。この医進コースで海に深く触れて様々なことを学び、体験できた事はすごく良かったと思います。海は家からは遠いですが、海洋学習で学んだ事を日常生活にも活かしたいです。また、大人になってもこのような活動があれば参加したいと思いました。

森末雄大：今回の海洋学習では、集められた牡蠣のフジツボと汚れを取っての分別はとても大変であったのと同時に漁師さん達の牡蠣の選別の技術はすごいなと思いました。選別作業の後に食べた牡蠣はとても美味しく、全体を通してとても人生にとって貴重な体験ができたと思いました。この一年間を通しての海洋学習は自分の中に新しい知識や経験を多く取り入れる事ができるとも貴重な体験になりました。アマモ再生活動や漁協や漁師の方々から直接話を聞くといった活動により、あまり深く考えたことのなかった海に対して多くの疑問や興味が湧き上がってきました。また、以前とは違った視点で海を観察し、考える事が出来ました。今年度の海洋学習で学んだ事を今後の学習や日常で生かしていきたいです。とても内容の濃い、充実した学習ができたと思います。

服部蒔季：牡蠣の水揚げをしてこんなにたくさんの牡蠣を見たのは初めてでした。一個一個殻をキレイにする作業は大変でしたが、特大の牡蠣があった時は素直に嬉しかったです。牡蠣のBBQほど贅沢なことはないですね。最高の一言です。1年間の海洋学習を通して、実際に海に行き体験して多くの事を学ぶことができました。私たちと海との繋がりに気づき、里海とは何か、何の意義があるのかを知りました。この学びを今後活かしていきたいと思います。

春名高歩：私は牡蠣の入った箱を包装する係の仕事をして頂いた。みんなが見た光景や行った事を見られなくて少し残念な気持ちがあるが、みんなとは違った形で水揚げの仕事を手伝えたので嬉しい気持ちもある。普段、私は牡蠣が苦手であるが、今回の牡蠣はとても美味しく頂けた。帰りのバスで日生と広島で牡蠣において、味が違うと聞いたので食べ比べしたいと思った。自分で海と関わる事の少ない人生と決めつけていたが、高校生の時に地元の県の海にふれる、考えることが出来て良かった。将来的に海洋関連の仕事に就く可能性は低いですが、これまで体験してきた事を活かせるようにしたい。海洋学習のように、現地へ行って自分の目で確かめるようにしていきたい。

1 1) アマモポッド苗生育完了

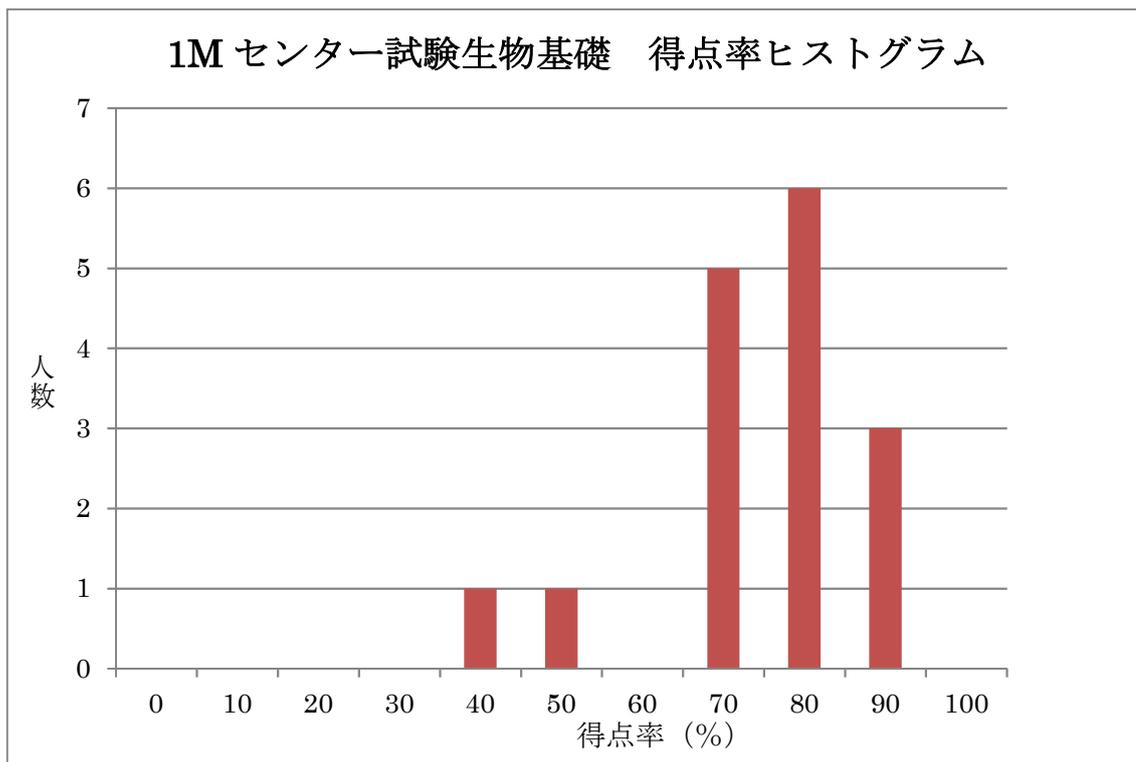
3月8日(木)

生物室で栽培を続けていたアマモポッドが苗として生育。NPO法人里海づくり研究会の田中さんが日生の海へ潜水し、定植した。里海づくりの一連の体験活動が完了した。



1 2) 1年次修了時点での生物基礎の学力について

本海洋実習において、カリキュラムとして生物基礎の授業時間に実施したものが24時間であった。生物基礎は週2単位、年間70時間のカリキュラムである。海洋実習実施のため、課外補習として週1単位を追加し、1年間で生物基礎(数研出版)のすべての内容を履修することができた。最終授業日に2018年1月実施のセンター試験生物基礎に取り組んだ。1M16名の平均点が50点中40.1点であった。大学入試センター発表の平均点は35.6点である。



1 3) 2・3年生の課題研究について

マリンチャレンジプログラムに採択され、中四国ブロック大会で優秀賞を受賞、3月末の全国大会(東京)で発表予定である。本年度の1年生も来年度のマリンチャレンジプログラムに応募しており、海洋学習を通じた課題研究カリキュラムの確立が図られつつある。

②次年度への課題

本年度は1年生を中心としながらも、全学年で体験学習などに参加してきた。海洋学習2年目となる来年度は、各学年で取り組む体験学習や課外活動を精選する必要がある。また、上級生が下級生を指導し、本校医進コースの伝統として定着させていきたい。

6. 主な連携機関及び内容

①備前市立日生中学校・日生漁協

アマモ場再生活動および聞き書き学習、カキ養殖に関わる体験活動での連携。

②NPO 法人里海づくり研究会議

アマモに関する講義、アマモポッド指導、里海に関する講義、課題研究への助言・指導など。

③おかやま環境ネットワーク・おかやま生活協同組合

シンポジウム開催主催など。

医進コース1年生「里海創生 ～吉井川流域および児島湾における生物多様性評価～」

【実践のねらい】

岡山県は児島湾干拓の歴史もあり、多くの海岸が護岸されている。ゆえに、瀬戸内海沿岸他県と比べ海への興味・関心を持ちにくい。さらに、生物基礎で学習する生態系や物質循環の単元において、生徒の理解・視点を広げるためにフィールドでの探求活動が求められている。本校は吉井川河口近くに位置し、里海学習のフィールドとして期待できる干潟が近隣に存在する。また、アマモ場再生で知られる日生湾での体験学習を通して、吉井川河口との比較や2年次で取り組む課題研究テーマへ発展させる。本校独自の課題研究カリキュラムとして、児島湾における生物多様性調査に継続的に取り組む環境を整える。

【主な連携機関と内容】

- ・日生町漁協および備前市立日生中学校
(アマモ場再生活動、カキ出荷経験、聞き書き、中学生との協働)
- ・NPO 法人里海づくり研究会議
(アマモポット作成指導)

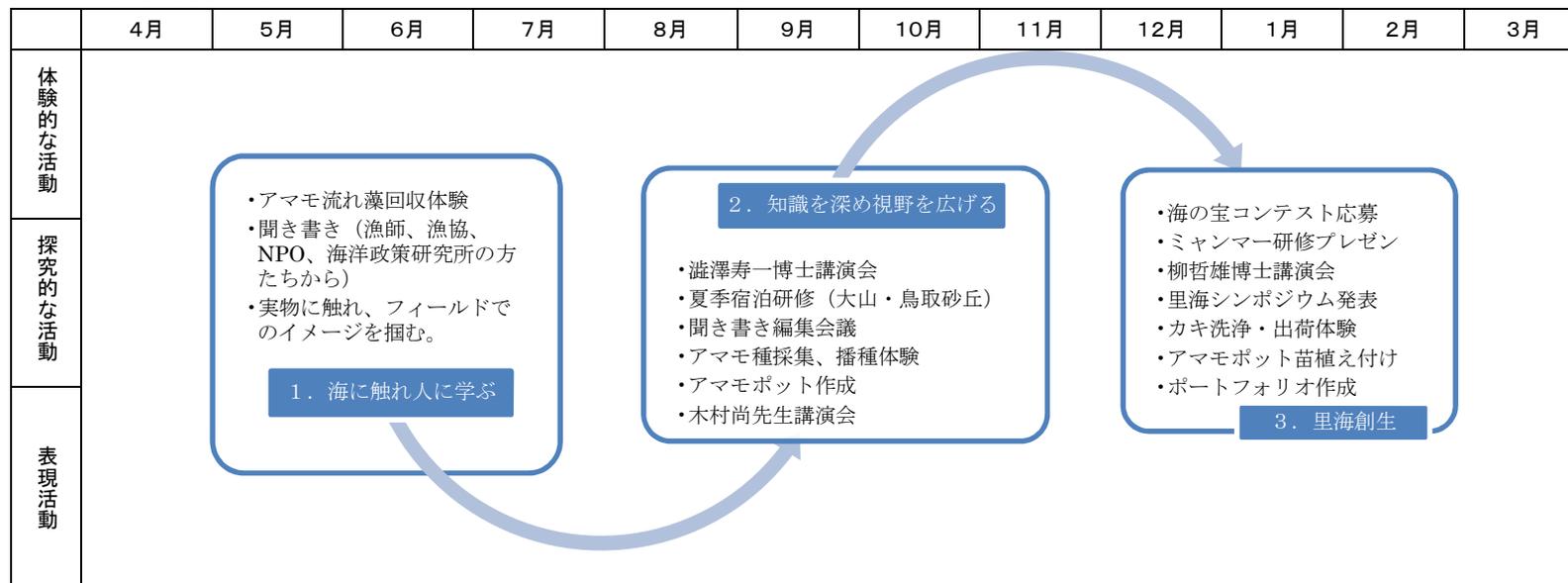
○時数 6月～3月 48時間（理科生物基礎24時間、課外活動24時間）

○関連 理科、国語科、情報科、英語科

○目標 (1) 日生におけるアマモ再生活動に取り組むことによって、主体的に環境保全の意義について考えることができる。

(2) 漁協でのカキ選別や出荷座業を経験することにより、地域経済と海とのつながりを通して物質循環の重要性を実感することができる。

(3) 「聞き書き」や学習内容のプレゼンテーション作成・発表を通して、自らの学習内容を主体的に伝えていくことができる。



医進コース2年生「里海創生 ～吉井川流域および児島湾における生物多様性評価～」

【実践のねらい】

岡山学芸館高等学校は吉井川河口に位置し、西大寺会陽や地元商店街のマルシェ活動に参加するなど地域との繋がりが深い。しかし、吉井川流域や児島湾をフィールドとした調査・研究には取り組めていなかった。新学習指導要領で求められる探究型解決力を有した生徒を育成するために、「里海」モデルケースである日生湾と環境要因を比較することによって、児島湾での里海再生の糸口を探る課題研究カリキュラムの作成を目的とした。

【主な連携機関と内容】

- ・日生町漁協および備前市立日生中学校
(アマモ場再生活動、カキ出荷経験、聞き書き、中学生との協働)
- ・NPO 法人里海づくり研究会議
(アマモポット作成指導)

○時数 6月～3月 81時間（理科生物21時間、課外活動60時間） ○関連 理科、国語科、情報科

- 目標
- (1) 日生におけるアマモ再生活動に参加し、地元吉井川河口域と比較することで、環境の違いを探究的に考察できる。
 - (2) 漁協でのカキ選別や出荷座業を経験することにより、地域経済と海とのつながりを通して物質循環の重要性を実感することが出来る。
 - (3) 課題研究の学会発表を通して、自らの学習・探究内容を主体的に伝えていくことが出来る。

